

『鉄腕アトム』の放送に関する時代考察

～編成と産業の視点から～

古田 尚輝

第1章 はじめに

第1節 評価の高まりと未熟な歴史研究

第2節 調査対象と調査法

第2章 1960年代前半の日本のテレビ放送

第1節 テレビ放送の量的拡大

第2節 新興産業としての放送

第3章 1960年代前半のテレビ編成

第1節 国産映画の空白を埋めたアメリカ・テレビ映画

第2節 海外アニメーションから国産アニメーションへの助走

第3節 「映画」国産化の進展

第4節 子ども向け番組の編成

第4章 民放3局の編成方針と経営

第1節 編成方針の違い

第2節 経営格差

第5章 アニメーション製作業の組み込み

第1節 放送とアニメーション製作業

第2節 放送局・広告代理店・アニメーション製作会社の関係

第3節 番組提供料と製作費

第6章 むすび

第1章 はじめに

第1節 評価の高まりと未熟な歴史研究

昨今、宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』（2001年7月公開）や押井守監督の『イノセンス』（2004年3月公開）など日本の幾つかの劇場用アニメーションが海外に輸出され、一定の関心と評価を得ている。一方、作品の大半を占め

るテレビジョン放送用アニメーションは2003年には地上波で週84本¹⁾が放送される盛況で、なかには『ポケット・モンスター』(1997.4～、テレビ東京系で放送)のように放送開始から3年も経たないうちに64の国と地域に輸出²⁾された例も現れている。日本のアニメーション産業の規模は、映画・テレビ放送・ビデオ販売を合わせて2002年で2,079億円³⁾、世界のアニメーション市場に占める割合は1996年で65%⁴⁾と推定されている。

こうした事例に刺激されたかのように、最近、それまでは“一部のマニアの占有物”と目されてきた日本のアニメーションに対する再評価が進み、同時に2つの議論が巻き起こってきた。

ひとつは、その国際競争力に着目して、アニメーションを日本あるいは地域の戦略的な産業として育成しようという提言や施策⁵⁾である。最近では、2002年(平成14年)11月に知的財産基本法が成立し(2002.12.4公布、2003.3.1施行)、翌年3月にこれに基づいて内閣に知的財産戦略本部が設置された。そして、各省がそれまで別々に行ってきた施策を計画的に実施し予算の効率的な配分を図ることとなった。戦略本部は2004年4月に「コンテンツビジネス振興政策」を発表し、アニメーション・映画・ビデオゲーム・音楽・文芸・写真などの創造物を幅広く「コンテンツ」と定義し、その振興策を概括的に示した。また同年5月には、「コンテンツの創造、保護及び活用の促進に関する法律」(通称「コンテンツ促進法」、2004.6.4公布・施行)が議員立法によって成立した。この法律は国などの公的機関が民間に委託したコンテンツの著作権を基本的に制作者に与える条項を入れた点に特徴があるが、人材育成や海外事業展開など国や地方自治体等が行うべき基本的な施策を網羅するに止まっている。一方、同年12月には、信託業法が1922年の制定以来80年ぶりに改正され、従来は土地等に限られていた信託財産の対象に著作権等の知的財産が加わり、映画やアニメーションなどの制作費を集める方法が広がった。

しかし、日本のアニメーションの製作と輸出は、政府の振興策や公的な助成がないまま純粹に民間企業の営利事業として行われ、現在の地位と評価を得るに至った経緯がある。政府の施策も、経済産業省が主管するデジタル技術を使った製作装置に対する助成や文化庁主催の「メディア芸術祭」⁶⁾のように受賞作品に対する賞金授与など対象も額も限られ、フランス等で実施⁷⁾されている作品制作に対する公的助成や融資、放送等における自国製品の割当義務(クオ

ータ)とは程遠いのが現状である。

もうひとつの議論は、前述した『千と千尋の神隠し』や『ポケット・モンスター』などの個々の事例を全体にまで拡大した“日本アニメーション礼賛論”の氾濫である。これらの中には歴史的な検証や客観的な評価の欠如が目立ち、なかには海外に輸出された作品の一覧を出典も明示せずに掲載している出版物や欧米で指摘されている暴力的で性的という日本のアニメーションに対する批判を意図的あるいは無意識に捨象した論考が見られる。

このような“性急な施策”や“過大な礼賛論”の出現は、日本のアニメーションに対する海外の評価が契機となっており、その意味では国外の評価をもとに国内での認知が進む従来からの日本文化再評価のパターンを踏襲している。現実には、日本のアニメーション業界はひとにぎりの個人・集団・企業が支えてきた側面が強く、ほかは長期にわたって冷笑や軽視、放任を決め込んできたとも言える。このことは、日本のアニメーション業界を強固な仲間意識に支えられた社会にするとともに、やや閉鎖的なものにしてきたとも考えられる。

日本の最初のアニメーション⁸⁾は、欧米に遅れて第1次世界大戦後の1910年代後半に製作されている。しかし、社会的な認知を得るようになるのは、国産テレビ・アニメーションの放送が隆盛に向かう1960年代後半以降のことである。このころからアニメーションという言葉が使われ始めるが⁹⁾、テレビ・アニメーションは20年余り「漫画映画(マンガ映画)」あるいは「漫画(マンガ)」と表記されていた。これがテレビ番組として地位を確立し言葉としても定着するのは1970年代後半のことである。たとえば、大手アニメーション製作会社のひとつ日本アニメーション¹⁰⁾がズイヨー企画から社名変更するのは75年、NHKが初めてアニメーションという言葉を使った番組『世界のアニメーション』(ヨーロッパ放送連合EBU加盟放送機関が製作した作品)を総合テレビで放送したのは76年4月、日本最大のアニメーション製作会社東映動画が東映アニメーションと社名変更したのはごく最近の99年のことである。

こうした社会的認知の遅れや業界の体質は、研究にも影響を及ぼしている。アニメーションの研究は戦前から細々と続けられてきたとは言えるものの、研究者が増え内容も多彩となるのは日本のアニメーションが海外でも注目され始めた90年代以降である¹¹⁾。最近では国内や海外でも研究が進み、日本のアニメーションの歴史についても幾つかの著作¹²⁾が刊行されている。しかし、これ

らは主に劇場用アニメーションの作品や作家を対象としており、テレビ・アニメーションの歴史に関しては、文献の大半が当事者の内輪話や熱狂的なファンが綴ったものということもあって、学術的な研究が遅れている感が否めない。

日本で最初の本格的なシリーズ・アニメーション¹³⁾と言われる『鉄腕アトム』(1963. 1～66. 12 フジテレビ系で放送、30分 193話、虫プロダクション製作)の放送が始まってから今年で40年余が経った。

本論は、この機会をとらえて、『鉄腕アトム』がなぜ1960年代前半に放送されたか、その要因を番組編成と番組制作、それに産業の面から考察し、『鉄腕アトム』の時代を日本の放送史のなかに位置付けようとする試みである。

第2節 調査対象と調査法

本論では、対象とする時期を、『鉄腕アトム』が始まった1963年(昭和38年)を中心に1960年代前半とした。そして、その時期に、日本のテレビ放送が普及・編成・番組制作・事業経営の面でどのような状況にあったのかを調査することにした。

また、対象とする放送事業者を、国産シリーズ・アニメーションを先行的に放送したフジテレビ、ラジオ東京テレビ(KRT、現在のTBS)、日本教育テレビ(NET、現在のテレビ朝日)の3局¹⁴⁾とし、対象とするアニメーションも『鉄腕アトム』、『エイトマン』(63. 11～64. 8 KRT系で放送、30分 56話、TCJ製作)、『狼少年ケン』(63. 11～64. 12 NET系で放送、30分 86話、東映動画製作)の3作品(表1参照)として、必要に応じてほかの放送事業者や作品に言及することとした。

調査は文献と関係者への取材によって行った。これを初期の作品の視聴で補った。前述したように学術的な文献の不足は否めなかったが、関係者の回想録

表1 対象とする国産シリーズ・アニメーション

タイトル	放送局	放送期間	製作	提供社	広告代理店
『鉄腕アトム』	フジテレビ	1963. 1～66. 12 30分 193話	虫プロダクション	明治製菓	宣弘社
『エイトマン』	TBS	1963. 11～64. 8 30分 56話	TCJ	森永製菓	電通
『狼少年ケン』	NET	1963. 11～64. 12 30分 86話	東映動画	丸美屋食品工業	旭通信

(注：図表の出典は文末に記載。以下の図表も同様)

や手記、放送事業者やアニメーション製作会社の社史のなかには参考となるものも若干含まれていた。

参考までに『鉄腕アトム』の概要を記すと、この作品は漫画家の手塚治虫氏が1951年から雑誌『少年』に連載していた漫画を原作に、手塚氏自身が62年に設立した虫プロダクションが最初に製作したテレビ放送用のシリーズ・アニメーションである。物語は、7つの超能力を持つ少年ロボットのアトムが地球の市民と平和を守るために悪者たちと戦うサイエンス・フィクションである。平均視聴率は25%を記録し、その後のアニメーション・ブームのさきがけとなった。虫プロダクションは、経費の節約と継続的で効率的な製作を図るため、“三コマ撮り”¹⁵⁾や同じセル画を何回も使用する“バンク・システム”など極端な省力化を行った。この作品は、最初の本格的な国産シリーズ・アニメーションとして画期的であったばかりでなく、連載漫画を原作にしていること、製作に極端な省力化システムを採用したこと、製作費を回収するためキャラクターの商品化(マーチャンダイジング)を行いまたアメリカに作品を輸出するなど、その後の日本のアニメーション製作や事業展開の原型ともなった。

第2章 1960年代前半の日本のテレビ放送

『鉄腕アトム』の第1話がフジテレビ系で放送されたのは、1963年(昭和38年)1月1日である。なぜ、『鉄腕アトム』がテレビ放送開始から10年目に始まったのか。この問いに答えるには、アニメーションを放送する側と製作する側、すなわち当時の日本のテレビ放送の成熟度とアニメーション製作会社やプロダクションの製作能力の両面から検証する必要がある。

『鉄腕アトム』の放送前には、東映動画が『白蛇伝』(58.10 公開)をはじめ『少年猿飛佐助』(59.1)や『西遊記』(60.8)など合わせて6作の劇場用長編アニメーションを製作している。また、テレビ放送でもアメリカのシリーズ・アニメーションと僅かではあるが国産の短編アニメーションが放送されている。しかし、国産のシリーズ・アニメーションの放送は「リスクが大きすぎて無理だというのが常識」「経費と時間、要員態勢などの理由で実現不可能」¹⁶⁾とされていた。

果たしてこれがどのように解決されたかは別稿に譲ることにして、本論では

1960年代前半の日本のテレビ放送を、編成と番組制作、事業経営の観点から考察することにする。

第1節 テレビ放送の量的拡大

1960年代前半は、日本のテレビ放送が放送局数、放送時間、視聴者数で急速な量的拡大を遂げ、現在に至る放送事業や番組編成の骨格を形成する時期である。

日本の放送史研究では、ラジオ時代（1925年から1960年代前半ごろ）、テレビ時代（1953年から1980年代半ばごろ）、多メディア時代（1982年から現在）と時代区分しているのが一般的である¹⁷⁾。この区分は、新たな放送メディアの登場を起点にそのメディアが支配的であった時期までを区切りとしている。このうちテレビ時代を、放送の普及、事業経営、番組制作、編成を基準にさらに区分すると、ほぼ10年ごとに前期・中期・後期に分けることができる。

このうち前期（1953年から63年ごろ）は、テレビ放送が急激に普及し、従来のラジオ放送に代わって主要な放送メディアとして確立する時期である。

日本のテレビ放送は、1953年（昭和28年）2月にNHK東京テレビジョン局が開局して始まり、8月には商業放送（民間放送、放送法では「一般放送事業者」と規定している）の日本テレビ放送網が放送を開始した。その後、テレビ放送局は57年の田中角栄郵政大臣による大量予備免許もあって急速に増え、『鉄腕アトム』が始まる63年にはテレビ放送を実施する一般放送事業者は47社に達し、全国のほぼ各県でNHK総合テレビジョン局と教育テレビジョン局、民間放送局1局（“1県1民放”）が開局するに至る（図1参照）。

東京では、日本テレビに続いて2年後の55年4月にそれまではラジオ放送だけ実施してきたラジオ東京がテレビ局（KRT、60.12東京放送（略称TBS）に社名変更）を開局した。また、59年には、2月に日本教育テレビ（NET、77.4全国朝日放送（略称テレビ朝日）に社名変更）、3月にフジテレビジョンが相次いで放送を始めた。この2局は、開局時期の遅れから、日本テレビとKRTの“先発局”に対して“後発局”と呼ばれた。こうして、テレビ放送開始から6年間で東京12チャンネル（64.4開局、81.10テレビ東京に社名変更）を除く現在の民放4局体制が整う。

放送の普及の指標とされるNHKのテレビ放送受信契約数は、1950年代後半

から始まった高度経済成長による個人所得の増加、受像機の大量生産と価格の低下、相次ぐ放送局の開局、59年4月の皇太子ご成婚の放送などを要因に、年間200万件から300万件という驚異的な伸びを示し、61年度末に1,000万件（世帯普及率49.5%）、63年度末に1,500万件（75.9%）を超えた（図2参照）。

また、1日平均の放送時間も、63年度末にはNHK総合テレビが17時間44分、民放が45社平均で14時間07分となり、午前6～7時台から午後10～11時台まで放送休止時間のない「全日放送」がほぼ実現する（図3参照）。

次のテレビ時代中期（1963年から74年ごろ）は、1964年の東京オリンピックを経てさらに成長を遂げたテレビ放送が73年秋の第1次石油危機によって一時的に停滞するまでの時期で、テレビ放送の拡大期にあたる。

この時期は、前期には放送局の置局が波長が長く到達範囲の広いVHF（Very High Frequency; 超短波）によって進められたのに対して、波長が短く県域放送に適しているUHF（Ultra High Frequency; 極超短波）によって行われ、各県で“民放2局目”の開局が相次いだ。民間放送のテレビ放送事業者は、1963年には47社であったが、74年には倍以上の105社を数えている。また、NHKのテレビ放送受信契約数は67年12月に2,000万件（世帯普及率83.1%）を超え、74年度末には2,574万件（91.7%）に達している。さらに、60年に一部の番組で始まったカラー放送が質量ともに発展し、71年10月にNHK総合テレビと日本テレビの放送が全時間カラーとなった。

『鉄腕アトム』は、このようなテレビ時代の前期から中期への移行期、すなわち日本のテレビ放送が急速な成長期から拡大期に入る境目の1963年に放送が始まった。これをきっかけに同年11月にはKRTが『エイトマン』、NETが『狼少年ケン』の放送を開始し、国産のシリーズ・アニメーションは2年後の65年には海外アニメーションを殆ど駆逐するまでとなる。

第2節 新興産業としての放送

1960年代前半の日本は高度経済成長期にあった。高度経済成長は1955年（昭和30年）ごろから73年（昭和48年）までほぼ18年間続き、その間の実質経済成長率は年率で10%を超えた。この間、鍋底不況（57～58年）、62年不況、65年不況など短期の不況を除いて、大半は神武景気（55～57年）、岩戸景気（58～61年）、いざなぎ景気（65～70年）などの長期の好況が続いた。

単位：社

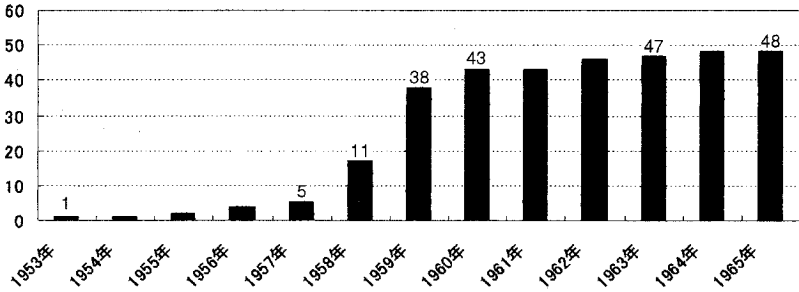


図1 民間テレビ放送事業者数の推移

単位：万件

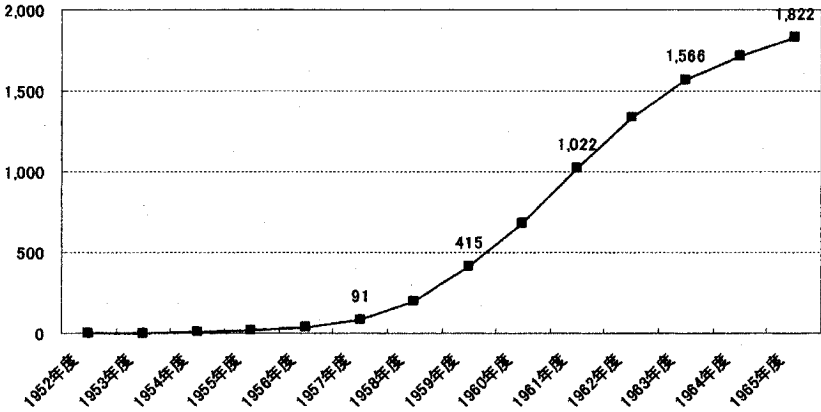


図2 NHK テレビ放送受信契約者の推移

単位：時間

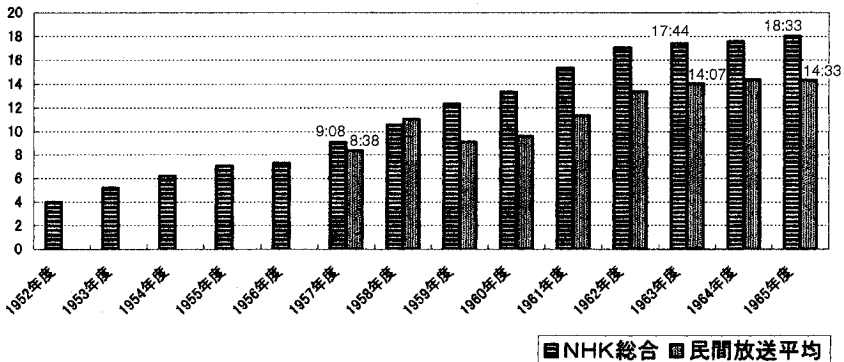


図3 テレビ放送時間の推移 (1日平均)

旺盛な個人消費と民間設備投資が高度経済成長を支え、技術革新と石炭から石油へのエネルギー革命が推進力として働いた。これを象徴するのが個人所得の増加による耐久消費財の急速な普及と“投資が投資を呼ぶ”と言われた重化学工業を中心とした設備投資の大幅な増加である。耐久消費財では“三種の神器”と呼ばれたテレビ受像機、電気洗濯機、電気冷蔵庫が、50年代後半から60年代前半にかけて驚異的な速度で普及した。普及は設備投資と個人消費の連関、つまり企業の設備投資によって大量生産が可能になり価格が低下して需要を拡大しそれがまた設備投資を生むという循環のなかで起こった。

なかでも白黒テレビ受像機の出荷台数は、1955年には約13万台だったが、60年には358万台、65年には461万台に達した¹⁸⁾。価格も下がり続け、例えば14インチの受像機の価格は55年には12万4,000円だったが、60年には5万4,000円から6万3,000円、65年には3万9,000円から4万9,000円と10年前の3分の1まで下がった¹⁹⁾。これに伴い、テレビ受像機の普及率が上がり、経済企画庁の消費者動向予測調査によると、60年の44.7%が65年には95.0%にも達した。

マスメディアもまた、高度経済成長の過程で急速に成長した。図4は、1955年度から65年度まで5年ごとに新聞、出版、放送の収入を示したものである。このうち、放送の収入（NHKと民放の事業収入の合計）はテレビ放送の収入の伸び²⁰⁾に支えられて急激に増え、旧来からのマスメディアである新聞、出版の収入に迫っている。1955年と65年の収入を比べると、新聞が2.44倍、出版が3.95倍であるのに対して、放送は9.44倍にも増加している。放送の収入の伸び率は国民総生産の伸びを3倍以上上回り、国民総生産に占める比率も55年が0.25%、60年が0.28%、65年が0.29%と着実に上昇している。

このように、放送は、高度経済成長が始まる直前の1953年にテレビ放送という新たな媒体を得て、55年からの高度経済成長を追い風に急成長した新興のマスメディアである。その一方で、放送は、テレビの広告放送によって耐久消費財の大量消費を促し、放送局の開局と放送の拡大に伴う設備投資やテレビ受像機の販売を通じて電気機器産業の発展に貢献し、番組制作や広告を介して新たな産業分野の開拓と就業人口の増加に寄与した。この意味で、放送は高度経済成長を促進する要因ともなった²¹⁾。

新興のマスメディアとしての放送、特にテレビ放送の位置づけを示している

単位:億円

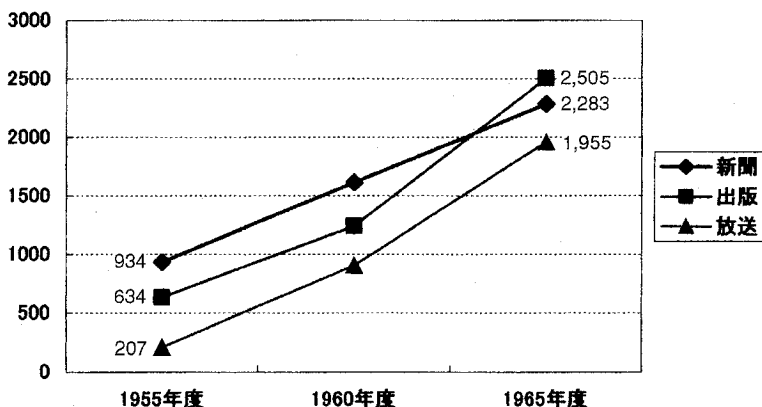


図4 マスメディアの収入

単位:億円

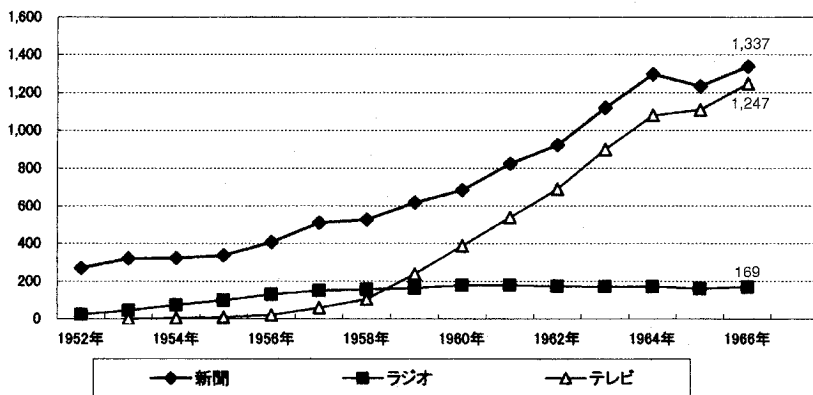


図5 媒体別広告費

もうひとつの指標が広告費である。これを媒体別に見ると、図5のようになる。テレビ広告費は放送開始から僅か6年目の1959年にラジオ広告費を上回り、63年には899億円（総広告費の30.1%）に達している。そして、75年には新聞広告費を抜いて媒体別広告費で1位となり、4,028億円（総広告費の32.5%）を記録する。

テレビ広告費が急激に増加した要因として、高度経済成長、放送局の増加、それに在京民放キー局による地方民放局の系列化（ネットワーク）が挙げられ

る。このうち在京キー局によるネットワークは、1960年から70年にかけてニュース交換協定を基本に形成²³⁾されたが、やがて系列局による一般番組の放送に拡大して同一番組が全国で放送されることになり、テレビ放送の広告価値をいっそう高める要因として働いた。

また、1960年代初めに機械式の視聴率調査²³⁾が導入されたことも、テレビ放送の広告価値を高める補助的な要因となった。これによって放送番組の広告価値が数字で客観的に示されることになり、視聴率による放送番組の序列化を招く一方で、高視聴率番組の広告価値をいっそう高める結果となった。

放送は基本的にサービスの提供を業務としているが、サービスの素材となる放送番組は外注率が高く、現在でも就業人口はNHKと民放を含めて約4万人、地上波放送の事業者数は200余り²⁴⁾、国内総生産に占める事業収入の比率も約0.6%と低い。しかし、収入、換言すれば経済的価値を生み出していること、専業人口を擁していること、放送事業者がそれぞれ番組制作と放送のシステムを構築して国民生活に深く組み込まれていること、放送機器の受注や受像機の販売、放送の送信等を通じて電気機器産業や通信産業などの他産業と連関していること、さらに広告放送によって大量消費を促進していることなどを考えると、放送は小規模ながらも自立した産業と言えるのではないだろうか。この意味で、放送は、急速なテレビ放送の普及によって、1960年代前半に、以前のラジオ放送の時代とは比較できないくらいの産業的要素を持ち始めたという視点も成立すると思われる。

第3章 1960年代前半のテレビ編成

1960年代前半は、日本のテレビ編成にとって、放送休止時間のない全日放送に向けて放送時間の拡充が進む時期である。また、番組の国産化がテレビ映画とアニメーションの分野で進む時期でもあった。

東京では、1959年にフジテレビとNETが開局し、既に放送を始めていた日本テレビとKRTを合わせて民放4局体制となった。また、同年4月の皇太子ご成婚の放送を機にテレビ放送が急速に普及した。しかし、各局とも午前8時台から10時台までと午後1時台から4時台まで、1日4時間から5時間余りの放送休止時間があった。また、NHK、日本テレビ、KRTが休止時間も含めて

午前6時台から午後11時台まで放送していたのに対し、開局したばかりのNETとフジテレビは、終了時間こそ他局と変わらなかったが、開始時間はそれぞれ午前9時45分と10時30分であった。

こうした放送局による放送時間の違いや休止時間は、1960年度から2年間ではほぼ解消された。“不毛の時間帯”と言われた休止時間帯は、午前にはNHKが61年4月に連続テレビ小説第1作『娘と私』を始めて開拓し、午後にはフジテレビが60年8月に『日々の背信』を開始して主婦層を対象とした“昼メロ”の時間帯に塗り替えた。こうして62年度には、午前6時代から午後11時台までほぼ休止時間のない全日放送が各局で実現する。

全日放送でどのような種類の番組が放送されていたのか。『鉄腕アトム』の放送が始まる前年1962年（昭和37年）4月のテレビ番組予告表を見てみよう。表2に、NHK教育テレビを除く5局の4月第3週の月曜日の番組予告表を掲げた（KRTは1960年12月に東京放送（略称TBS）に社名変更）。

この表が示すように、放送番組の種類はニュース、ドキュメンタリー、学校放送番組、教養番組、ドラマ、映画、歌番組など殆どすべての分野にわたり、演出形式もスタジオ、フィルム構成、中継など多彩である。

番組編成では、NETが小中学校向けの学校放送番組を主に午前中に放送しているのを除いて、他の4局は多少の違いはあるものの報道・教育・娯楽番組の調和ある編成を行っている。これは後述するように、ほかが一般総合番組局であったのに対してNETが教育専門局であったことが原因である。

この時期の編成で特徴的なのは、民放4局が最も視聴率の高いゴールデンタイム（午後7時～10時）に一斉に外国映画を編成していることである。その数は月曜だけで8本²⁵⁾にも上っている。他局と同じ時間帯に同種の番組を集中的に放送する“競合編成”は日本の民間放送の歴史を貫く特徴のひとつであるが、外国映画の競合編成には歴史的な要因が関わっていた。

第1節 国産映画の空白を埋めたアメリカ・テレビ映画

1950年代後半から60年代前半にかけての日本のテレビ編成の特徴のひとつは、外国映画の隆盛である。外国映画の殆どがアメリカのテレビ映画で占められ、その“氾濫”はフジテレビとNETが開局した59年から始まり64年ごろまで続いた。しかし、その後は競合編成による視聴率の低下や国産テレビ映画

の増加などによって放送本数が減少した（図6参照）。

アメリカ・テレビ映画の輸入第1号は、56年4月にKRTが放送を始めた『カウボーイGメン』（～56.10）と言われている。自主制作とスタジオものを主としていたNHKも7月に『口笛を吹く男』（～57.4）、10月に『ハイウェーパトロール』（～60.7）を開始した。残る日本テレビも8月に『ジャングルジム』、11月に『名犬リンチンチン』（～60.12）で後を追った。同じ11月には、KRTが『スーパーマン』（～59.4）を始め、翌57年には4月にNHKが『アイ・ラブ・ルーシー』（～60.4）、11月にKRTが『名犬ラッシー』（～64.3）の放送を開始した。

一方、後発局と呼ばれたNETとフジテレビは、後発の不利を克服するため、アメリカ・テレビ映画を売り物のひとつにした。フジテレビは開局と同時に『ペリー・メイスン』（59.3～68.3）を放送し²⁶⁾、NETは開局年の11月から『ローハイド』（59.11～65.3）を始めた。

当時の日本は、56年の経済白書が「もはや戦後ではない」と書き、神武景気と岩戸景気で空前の好況に沸いていた。しかし、アメリカのテレビ映画はまばゆいばかりに豊かなアメリカの生活を映し出して視聴者の憧れを誘い、また56年秋に初めて日本語の吹き替え²⁷⁾が放送され、高い人気を保った。

1960年代前半のテレビ編成でアメリカのテレビ映画が大きな比重を占めた要因として、次の3つが指摘される。第1は、テレビ放送局のいずれもが歴史が浅くスタジオ不足やタレント不足に悩まされ、また国産テレビ映画の製作体制も整っていなかったため、外国産のフィルム番組、特にアメリカのテレビ映

単位:本

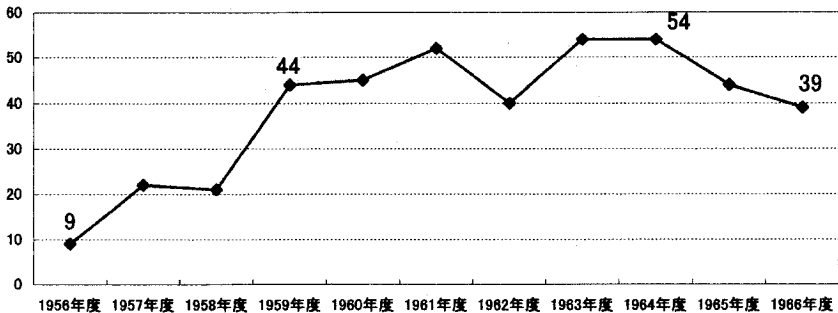


図6 アメリカ・テレビ映画の本数

表2 1962年4月の編成

【月曜日】

前6:00~後3:00

局名	放送時間	番組名	放送時間	番組名	放送時間	局名
NHK総合テレビ	前					NHK総合テレビ
	5	朝のひととき （らしの相談室）	テレビ体操			
NHK総合テレビ	6	朝のひととき （らしの相談室）	テレビ体操			NHK総合テレビ
	7	朝のひととき （らしの相談室）	テレビ体操			
NHK総合テレビ	8	朝のひととき （らしの相談室）	テレビ体操			NHK総合テレビ
	9	朝のひととき （らしの相談室）	テレビ体操			
NHK総合テレビ	10	朝のひととき （らしの相談室）	テレビ体操			NHK総合テレビ
	11	朝のひととき （らしの相談室）	テレビ体操			
NHK総合テレビ	後					NHK総合テレビ
	0					
NHK総合テレビ	0					NHK総合テレビ
	1					
NHK総合テレビ	1					NHK総合テレビ
	2					
NHK総合テレビ	2					NHK総合テレビ
	3					
日本テレビ		朝七時のニュース	あさのニュース	プロ野球ニュース		日本テレビ
東京放送		朝七時のニュース	あさのニュース	プロ野球ニュース		東京放送
フジテレビ		朝七時のニュース	あさのニュース	プロ野球ニュース		フジテレビ
日本教育テレビ		朝七時のニュース	あさのニュース	プロ野球ニュース		日本教育テレビ
前						前
5						5
6						6
7						7
8						8
9						9
10						10
11						11
後						後
0						0
1						1
2						2

後3:00以降

局名	NHK総合テレビ	日本テレビ	東京放送	フジテレビ	日本教育テレビ	局名
後						後
3		プロ野球中継 東映一週版	お茶の間映画館 嵐のアマリセ騎士 TBS ハイライト		ニコニコ株式市況	3
4	スポーツ中継 映画 再放送	フジテレビ ワンダフル クイズ		ニッサンテレビ名画座 お芝居とスバイ騒動 ドラマ この地果つるまで (再)		4
5		特別番組 佐野乾山討論会	ディスクタイム TBS ハイライト	おしるぎ 海外ニュース		5
6	ニュース 子どもニュース チロリン村とくろみの木 まんが	まんがショー まじろの冒険 毎日新聞ニュース	映画教室 現刊 世界の話題 読売テレビニュース	外国テレビ映画 第八救助隊 フジ子どもニュース	夕べの音楽 おしらせ	6
7	ヨーロッパ牧場の仲間たち みんなのうた 黒百合城の兄弟 今晩の番組から 笑気満載	牛若天狗いざ見参 ガイド カンロ カムカムショー ニュースフラッシュ 国際ニュース	マンガ劇場 テレビ映画 ウィリアム・テル テレビ夕刊	まんが 道のワイド 国内 冒険王クラブ 宝塚テレビ映画 次郎長売り出す (再) フジテレビニュース つるいぞろふたい	まんが ニゴも世界のニュース ガイド・笑気満載 オンワード なんでもクイズ NET ニュース 読者ニュース	7
8	ニュース バス通り裏 おし 私の秘密	テレビ映画 ボナンザ	テレビ映画 プロコ・シャイアン	時代劇 竜虎八天狗 外国テレビ映画 アイ・ラブ・ルーシー	映画 風雲黒潮丸 金の星銀の星	8
9	歌の広場 上方劇場 おいでやア	教授と次男坊	しゃぼん玉劇場 シャボン玉ミこちゃん ドラマ 青年の樹	外国テレビ映画 チェックナイト	外国テレビ映画 ニューブリード	9
10	二つの橋 きょうのニュース スポーツニュース 海外フラッシュ	今日の出来事 スポーツニュース 寛れチャンピオンアワー	ドラマ 咲子さんちよっと 月曜日男	スター千一夜 ヒットキッショー 外国テレビ映画 パリ指令69	皇室アルバム 外国テレビ映画 マイアミの戦探 おんなの恋	10
11	ニュースの焦点 日本縦断 科学時代 スポーツハイライト	夫婦百景 愛の劇場 テレニュース あしらの笑気・ガイド	ドラマ 花のれん ニュース 笑気満載 スポーツニュース 業高かおる世界の旅	時代劇 右門捕物帖 フジテレビニュース 短編映画	風電劇場 風の視線 ドラマ 指名手配 NET ニュース スポーツニュース	11
12	あすへの歩み ニュース・笑気満載 番組のおしるぎ	ニッポン問答 ニュース最終版	海外ニュース 現代の顔 (再) マルマン深夜劇場 金曜日の三時	プロ野球ニュース 英語に強くなる時間 (再) 明日のお天気	東西南北 読者ニュース 夜のこだま	

画に編成を頼ったことである。特に後発局のNETとフジテレビでは状況は深刻で、両局が開局した年の1959年10月にはNHKを含めて6局で1週間に32本のアメリカのテレビ映画が放送されていたが、その半数がNETとフジテレビによって占められていた²⁸⁾。特にNETは多数のアメリカ・テレビ映画を放送し、“外画のNET”と言われた。

第2の要因は、アメリカのテレビ映画の量産、価格の安さ、購入する側の日本の外貨事情の好転である。ハリウッドは、1950年代前半にテレビ放送局に劇場用映画を売らない方針を採っていたが、テレビ放送が急速に普及したため経営難に陥り、従来の方針を転換してテレビ放送用映画の量産に乗り出した。これらの映画は、制作費を自国内の放送で回収し輸出はいわば“2次使用”であったため、30分1本で200ドル²⁹⁾と比較的廉価であった。また、50年代後半に入って日本の外貨事情が好転し、当時実施されていた外貨規制が緩和されて放送事業者に対する外貨割当額も増加した。割当額は、56年度はNHKが6万ドル、日本テレビとKRTが4万ドルであったが、翌57年度にはそれぞれ9万ドル、6万5000ドル、6万ドルに引き上げられ³⁰⁾、外国映画をより多く購入することが可能となった。

第3の要因は、1956年10月に日本映画連合会を結成していた大手映画製作会社5社（東宝、松竹、大映、東映、新東宝）が劇場用映画のテレビ放送への提供を打ち切り専属俳優の出演を許可制にしたことである（5社協定）。2年後の58年9月には、日本テレビに劇場用映画を提供していた日活も映画連合会に加盟して協定に加わり（6社協定）、日本の大手映画会社6社の劇場用映画は新作と旧作を問わずにそれ以降テレビで放送されなくなってしまった。この日本映画の空白は、61年7月に新東宝が破産し保有していた映画を放出するまで続いた。これを埋めたのが大量のアメリカ・テレビ映画であった。

第2節 海外アニメーションから国産アニメーションへの助走

海外アニメーションの放送が始まった時期は、アメリカ・テレビ映画の隆盛期と一致している。むしろ、海外アニメーションは、アメリカのテレビ映画とともに購入されそのブームに乗るかたちで放送が始まったとも言える。両者の違いは、アメリカのテレビ映画は家族向けにゴールデンタイムに大量に放送されたが、海外アニメーションは子ども向けであったために放送時間帯も本数も

限られていたことである。

どのような海外アニメーションが『鉄腕アトム』以前に放送されていたのか。テレビ放送が始まった1953年から62年までに放送された海外アニメーションを文献によって調査した。これらの文献は『NHK総合テレビ番組確定表』を除いて4月の定時番組だけを掲載しているため、単発番組や4月以外に放送が始まり年度内に終了した定時番組は記していない。また、この時期には未だアニメーションという言葉が使われず「漫画映画」あるいは「漫画」と表記されており、外国産かどうか不明なものがある。さらに『まんが劇場』や『マンガ大行進』など番組名だけ掲載され内容が判明しないものもある。

調査の結果、『鉄腕アトム』以前に放送されたアニメーションの定時番組は、殆どすべてが海外アニメーションと推定される（表3参照）。

まず、NHK総合テレビは、56年度から62年度まで7年間にわたって毎日『漫画』という番組枠³¹⁾を設け、7分程度のアメリカの短編アニメーションを大量に放送している。これらの海外短編アニメーションは当初は番組枠の“埋め草”として、61年度以降は新設された「こどもの時間」の売り物として放送されている。

この番組枠で、56年度（19:00～07）はサンセット社などから購入した7分

表3 主な海外アニメーション（1956年～62年放送）

放送局	タイトル	放送期間
NHK (総合テレビ)	『クレージー・キャット』	1959.4～61.3
	『ポーキー・ビッグ』	1959.4～61.3
	『スクラッピー』	1959.4～61.3
	『フェリックス君』	1961.4～62.3
	『鉄腕ポバイ』	1961.4～62.9
日本テレビ	『テレビ坊やの冒険』	1956.4～56.9
	『ミッキーマウスクラブ』	1959.9～61.8
	『ウッドベッカー』	1961.9～64.8
KRT(TBS)	『マイティ・マウス』	1957.8～58.4
	『ヘッケルとジャッケル』	1957.10～58.6
	『ポバイ』	1959.6～65.8
フジテレビ	『ワンワン保安官』	1961.4～62.1
NET	『珍犬ハッケル』	1959.2～64.3
	『早射ちマック』	1960.1～66.3
	『バックスバニー』	1961.4～66.3

のアニメーション、57年度(18:00～10)はワーナー・ブラザーズ社の7分のアニメーション100本とソビエト製の『金色の矢』や『黄金のりんご』など10本、58年度(18:00～10)、59～60年度(18:00～07)は『クレージーキャット・シリーズ』『ポーキー・ピッグ・シリーズ』『スクラピー・シリーズ』『ファンタジー・フェイブル・シリーズ』、61年度は『フェリックス君』『鉄腕ポパイ』(17:35～45)と『カレイジャス・キャット』『ロッキー君とゆかいな仲間』(18:00～15)、62年度は『鉄腕ポパイ』(17:54～18:00)を9月まで放送している³²⁾。59年1月から日本語による吹き替えを行い、60年7月から東京・大阪でカラー放送となっている。

一方、民放³³⁾では、日本テレビは56年4月から日本語の吹き替えで『連続冒険漫画 テレビ坊やの冒険』(日曜18:05～15)、59年から『ミッキーマウスクラブ』、61年から『ウッドペッカー』(土曜19:30～20:00)を放送している。

また、KRTは57年から『ミルクィ劇場 マイティ・マウス』(57.8～58.4日曜19:30～20:00)と『漫画劇場 ヘッケルとジャッケル』(57.10～58.6金曜19:00～30、61年からNET系で放送)、59年から『ミルクィまんが劇場ポパイ』(59.6～65.8日曜19:30～20:00)を放送している。

フジテレビは61年から『外国まんが ワンワン保安官』(水曜19:30～20:00)、NETは開局直後の59年2月から『まんが映画 珍犬ハックル』(日曜18:00～30)と『まんが映画 一本足のキリギリス』(水曜18:15～45)、60年から『大商漫画劇場 早射ちマック』(月曜19:00～30)、61年から『カルピス漫画劇場 バックスバニー』(水曜19:00～30)を放送している。

これらの海外アニメーションは殆どがアメリカ製と推定³⁴⁾され、第2次世界大戦前から戦後かけて製作された古典的なものと50年代後半にアメリカの3大ネットワークやシンジケーション³⁵⁾で放送された新作とに分けられる。

NHKが放送した『クレージーキャット』(*Krazy Kat* George Herriman 1929～49製作)、『鉄腕ポパイ』(*Popeye the Sailor* Max Fleisher 1933～57製作)、『フェリックス君』(*Felix the Cat* Pat Sullivan 1920～36製作)、『スクラッピー』(*Scrappy Dick* Huemer 1931～41製作)は、前者に属する古典的な作品である。

一方、日本テレビの『ミッキーマウスクラブ』(*The Mickey Mouse Club*)と『ウッドペッカー』(*Woody Woodpecker*)は、前者が3大ネットワークの

ABCが1955年から59年に放送した*The Mickey Mouse Club* (Walt Disney Production 1955～59製作)、後者が同じABCが57年に放送した*Woody Woodpecker Show* (Walter Lantz 1940～1972製作)と判断される。いずれもアメリカで人気のあった子ども向けのバラエティ番組で、題名のアニメーションが挿入されている。また、KRTは『マイティ・マウス』(*Mighty Mouse* Paul Terry 1942～61製作)と『ヘッケルとジャッケル』(*Heckel and Jeckle* Paul Terry 1946～66製作)を放送しているが、恐らく戦後の製作であろう。

これに対して、NETはアメリカで放送された直後のアニメーションを編成しているのが特徴である。例えば59年から始まった『珍犬ハッケル』は58年10月からアメリカのシンジケーションで放送された*The Huckleberry Hound Show* (Hanna-Barbera Production)、60年から開始した『早射ちマック』は59年からシンジケーションで放送された*Quick Draw McGraw* (Hanna-Barbera Production)、61年から始まった『バックスパニー』は60年10月からABCで放送された*The Bugs Bunny Show* (Warner Brothers)である。

これらアメリカのアニメーションにはフルアニメーションとリミットドアニメーションが混在しており、動物を主人公に単純な筋書きで滑稽な仕草や誇張した動きを描いている。そのキャラクターのスピーディで奇抜な動き、優れた技法、量の多さは、その後の日本のテレビ・アニメーションの大勢がストーリー性に富んだ劇画調の方向に進んだとは言え、日本のアニメーション作家やその予備軍を圧倒し創作意欲を刺激したに違いない。また、その放送時間帯が国産アニメーションで代替されてゆく経緯を見ると、海外アニメーションの放送は国産シリーズ・アニメーションの放送への助走となったと考えられる。

第3節 「映画」国産化の進展

1960年代前半ごろまでの日本のテレビ放送では、フィルムによる番組はすべて「映画」と表記されてきた。これは放送局が自前のフィルム番組製作能力を持つ以前の過渡的な事象で、ニュース・フィルムやドキュメンタリーを製作するようになると、60年代後半からは映画会社が製作する劇場用映画やテレビ用映画を除いて「映画」という表記が消滅する³⁶⁾。この言葉の変遷にも日本のテレビ放送が外国映画や日本映画への依存から自立する過程が現れている。

第1節でも述べたように、日本の大手映画会社は1956年10月に5社協定、

58年9月に6社協定を結び、新作と旧作とを問わず劇場映画をテレビ放送に提供することを禁止した。その一方で、民間テレビ放送局の設立に参画し、東映・日活・新東宝がNETに、東宝・松竹・大映がフジテレビに出資した。大手映画会社は、新しく登場したテレビ放送を映画の存在を脅かすものとして門戸を閉ざすと同時に、その将来性にも備えたのである。

日本の映画産業は1950年代後半から最盛期を迎え、58年には映画館数が7,000、観客数が10億人、新作が400本を超え、その勢いは60年まで続いた。しかし、58年をピークに観客数と製作本数が減少に転じ、61年から凋落の傾向が顕著になった。61年7月には新東宝が倒産し、在庫559本のうち360本をテレビ放送用に売却することとなった。これによって6社協定の一部が崩れ、各社とも2年後の64年2月に、公開後7年後の映画、初年度は1社100本、放送回数2回という条件をつけて、劇場用映画のテレビ放送への提供に方針転換した。

大手映画会社は、それ以前から国産のテレビ映画の製作にも着手していた。東映はほかに先駆けて56年11月に東映テレビ・プロダクションを設立し、まず子ども向けテレビ映画の製作を始めた。同プロダクションは、1シリーズ30分13本、使用フィルムは劇場用映画の36ミリではなく16ミリという方針を立て、『風小僧』『七色仮面』『白馬童子』などを製作した。そして、資本関係があり東映社長の犬川博氏が社長を兼任していたNETで54年の開局早々から放送を始めた。これはNETが教育専門局で教育番組を多く編成する義務があったことに起因するもので、ここで論じている大人向けのテレビ映画の国産化には必ずしも該当しない。しかし、東映テレビ・プロダクションは、その後アメリカ・テレビ映画ブームが起これると、61年から国産テレビ映画のワイド化(60分)に踏み出し、『特別機動捜査隊』(61.11～77.3 NET系で放送)とその姉妹編『JNR 公安36号』(63.8『鉄道公安36号』に改題、62.6～67.3 NET系で放送)などを次々に製作した。

国産テレビ映画の製作が本格化するのには、1962年ごろからである。大手映画会社がテレビ室を新設し、在京民放各局も対応する部局³⁷⁾を設けた。国産テレビ映画の製作は、メジャー系と呼ばれた大手映画会社のテレビ部門や系列会社と、銀座プロ、テアトロ・プロ、日本電波映画などの独立系プロダクションが担った。

TBSは、58年に宣弘社製作の『月光仮面』（58.2～3放送）を短期間放送した後、61年10月の番組改定で国産テレビ映画の1時間編成（ワイド化）を打ち出した。そして、大映テレビ室製作の『人間の条件』（62.10～63.4放送、26回）を放送しそれが成功すると、月曜午後10時台を大映テレビ室の専門枠として翌63年には『図々しい奴』『赤いダイヤ』などのヒット作を出した。日本テレビも、63年以降、日活テレビ室製作の『青春アワー』、大映テレビ室製作の『この酒盃を』、東宝テレビ室製作の『青春とはなんだ』などを放送した。NETは、63年1月に東映テレビ・プロダクションと1週間あたり5番組5時間のテレビ映画を製作する基本業務協定を結び、国産テレビ映画の量産化に備えた。

一方、これまで日本映画の空白を埋めていたアメリカ・テレビ映画の放送本数は、1964年をピークに減少し始める。そして、その減少分を今度は国産テレビ映画が埋めることになる。

図7は、63年10月と67年10月のゴールデンタイム（午後7時～10時）に放送されたアメリカ・テレビ映画と国産テレビ映画の本数と時間を比較したものである。63年に48本・34時間30分あったアメリカ・テレビ映画が67年には20本・15時間と半分以下に減っている。逆に国産テレビ映画は、15本・11時間から53本・38時間30分と3倍以上伸びている³⁸⁾。また、ゴールデンタイムの中核をなす午後7時台と8時台を見ると、アメリカ・テレビ映画は63年には合わせて41本放送されていたが、67年には10本に激減している。反対に国産テレビ映画は、63年の8本が67年には34本と飛躍的に伸びている。国産テレビの内容時間も63年には1時間ものは7本だったが、67年には25本に増え、番組の“ワイド化”と製作能力の向上を裏付ける結果となっている。

こうした国産テレビ映画の著しい増加は、日本の映画産業と放送の関係の逆転を物語っているようである。かつてテレビ画面を空白にした映画産業は、テレビ放送という新興勢力の勃興に遭遇して、テレビ放送への依存度を高めてゆく。必ずしも適切でないかも知れないが、1960年度から70年度までの映画の興行収入と放送事業者の事業収入（NHKを含む）を5年ごとに対比した（図8参照）。この図が示すように、60年度には映画の興行収入が533億円で放送事業者の事業収入207億円の倍を超えているが、65年には映画が728億円、放送が907億円となって逆転し、70年には映画が755億円、放送が1,955億円と

単位:本

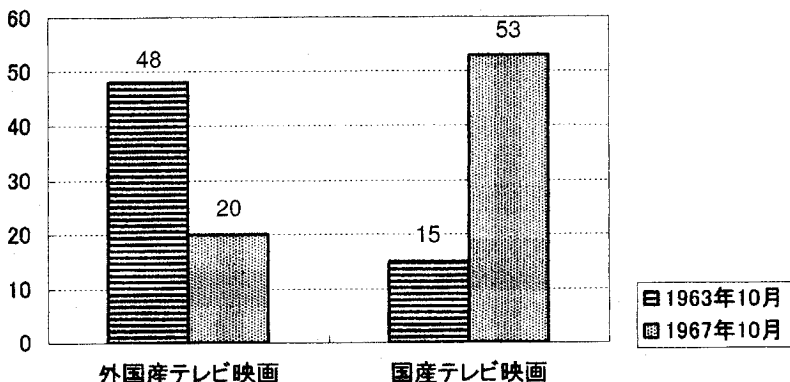


図7-1 外国産テレビ映画と国産テレビ映画の放送本数（ゴールデンタイム）

単位:時間

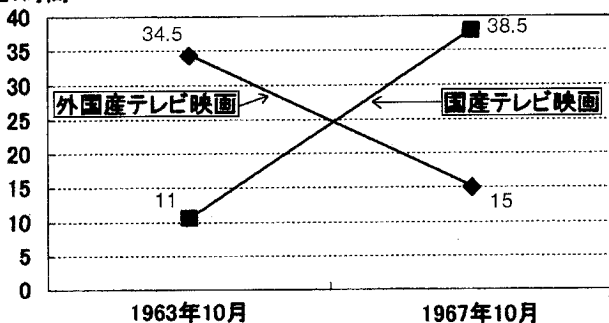


図7-2 外国産テレビ映画と国産テレビ映画の放送時間（ゴールデンタイム）

なり、放送が映画の2.5倍以上に達している。この変化は、放送が収入規模で映画産業を凌駕して映画産業を支援産業として配置してゆく過程を示しているのではないだろうか。

単位:億円

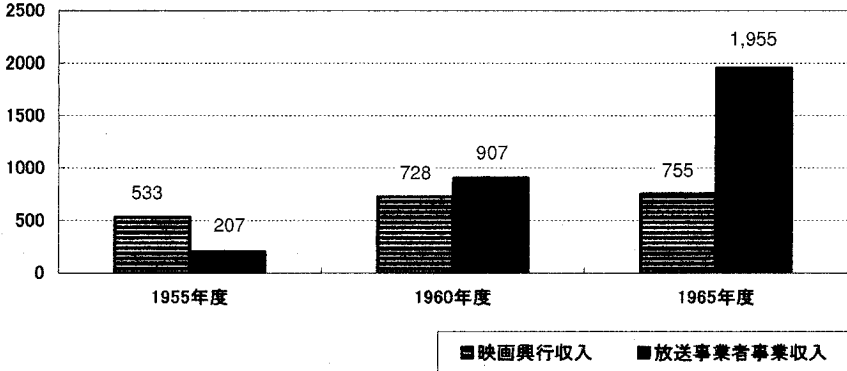


図8 映画興行収入と放送事業者の事業収入

第4節 子ども向け番組の編成

「映画」の国産化の進展は、子ども向けの時間帯の午後6時台でも見られる。国産最初のシリーズ・アニメーション『鉄腕アトム』も、63年1月からこの時間帯で（火曜18:15～45）始まった（64年1月から土曜19:00～30に移行）。このため、この節では『鉄腕アトム』放送前後の1962年度から64年度までの4月第3週の午後6時台の各局の編成を比較することにする。表4にNHK総合テレビ、日本テレビ、TBS、フジテレビ、NETの午後6時台の編成を示す。

まず1962年4月の午後6時台の編成で注目されるのは、第1にNHKが午後5時30分から7時までを「こどもの時間」と位置付け、6時台に少年・少女向けドラマ『黒百合城の兄弟』などを、その前の5時台に『こどもニュース』、人形劇『ちろりん村とくるみの木』（56.4～64.4放送）、『まんが』を集中的に編成していることである。一方、民放は午後6時台に「外国映画」あるいは「テレビ映画」と表記したアメリカ・テレビ映画を毎日のように編成している。その数は1週間で14本を数える³⁹⁾。海外アニメーションは僅かに1本、NETの『外国まんが映画 珍犬ハックル』（火曜18:15～45）だけである。

翌63年4月には、NHKが『まんが 宇宙家族』⁴⁰⁾（63.4～63.12放送）、フジテレビが『鉄腕アトム』（火曜18:15～45、同年1月から放送）、TBSが初めてのキャスターニュース『ニューススコープ』（月曜～金曜18:30～50、前年10月から放送、初代キャスターは戸川猪佐武と田英夫）を編成しているのが特徴である。TBSの『ニューススコープ』はNHKが60年4月から始めた

表4 午後6時台の編成(1962年~1964年)

1962年4月

	NHK総合	日本テレビ	TBS	フジテレビ	NET
月	オロップ牧場の仲間たち みんなのうた のり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		カンロ カムカムショー	テレビ映画 ウィリアム・テル	宝塚テレビ映画 次郎長売り出す (再)	オンワード なんでもクイズ
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
火	ぼくもわたしも名探偵 みんなのうた のり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		テレビ映画 ビーバーちゃん	テレビ映画 がんばれキャノンボール	外国テレビ映画 ローレンランジャー	外国まんが映画 珍犬ハックル
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
水	魔法のじゅうたん みんなのうた のり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		テレビ映画 ミッキーマウスクラブ	ゆうかん太郎	共同テレビ映画 若い炎	平凡 歌のベナントレース
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
木	あすをつげる鐘 みんなのうた のり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		テレビ映画 大海賊バイキング	テレビ映画 ラム・オブ・ジャングル	外国テレビ映画 アニーよ銃をとれ	ベルべ あこがれのステージ (最終回)
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
金	ドラが鳴る みんなのうた のり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	まんが こども世界ニュース ガイド・天気予報
		レッツゴー・ティーン	テレビ映画 警察犬キング	外国テレビ映画 名犬リンティ	外国テレビ映画 サーカスポーイ
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
土	走れチエス みんなのうた のり 黒百合城の兄弟 今晚の番組から 天気予報	牛若天狗いざ見参 ガイド	マンガ劇場 テレビガイド	進めラビット 案内 冒険王クラッチ ガイド	あしたの行楽地 こども世界ニュース ガイド・天気予報
		テレビ映画 モーガン警部	テレビ映画 ヒューリーと ベレル少年	宝塚テレビ映画 次郎長売り出す	雷印ホームジュスチャー
		ニュースフラッシュ 国際ニュース	テレビ夕刊 天気予報	フジテレニュース つよいぞラファイ	NETニュース 番組ニュース
日	ボンボン大将 危険信号 今晚の番組から 天気予報	たのしい科学 スター・ロータリー	コメディ アチャコ どっこい御用だ	コメディ 一心茶助	外国テレビ映画 ハーバーコマンド
		シャボン玉ホリデー	コメディ 青春タックル	外国テレビ映画 愛馬フリッカ	外国テレビ映画 ハイウェイパトロール

1963年4月

	NHK 総合	日本テレビ	TBS	フジテレビ	NET
月	泣くな太陽	まんがホームラン ガイド	いかすぞらビッド テレビガイド 番組ニュース	まんがの王さま・案内 つよいぞらフティ・案内	まんがデイクトルレーシー 子ども世界ニュース CM ローターリー・天気予報
	みんなのうた	カンロ カムカムショー	連続テレビ映画 冒険シリーズ	外国テレビ映画 アニーよ銃をとれ	東映テレビ映画 ロック物語
	おねえさんといっしょ	ニュースフラッシュ	ニュースコープ	サンケイテレビニュース	NET ニュース
	今晚の番組から 天気予報	国際ニュース	TBSニュース まんがのレングデー・天気予報	とびだせファイリッパ 番組ニュース	
火	ほくもわたしも名探偵	まんがホームラン ガイド	いかすぞらビッド テレビガイド 番組ニュース	まんがの王さま・案内 つよいぞらフティ・案内	まんがデイクトルレーシー 子ども世界ニュース CM ローターリー・天気予報
	みんなのうた	こまどりといっしょ	連続テレビ映画 冒険シリーズ	長編まんが 鉄腕アトム	東映テレビ映画 白馬童子
	おねえさんといっしょ	ニュースフラッシュ	ニュースコープ	サンケイテレビニュース	NET ニュース
	今晚の番組から 天気予報	国際ニュース	TBSニュース まんがのレングデー・天気予報	とびだせファイリッパ 番組ニュース	
水	魔法のじゅうたん	まんがホームラン ガイド	いかすぞらビッド テレビガイド 番組ニュース	まんがの王さま・案内 つよいぞらフティ・案内	まんがデイクトルレーシー 子ども世界ニュース CM ローターリー・天気予報
	みんなのうた	冒険少年団トリプルテン	連続テレビ映画 冒険シリーズ	外国テレビ映画 パットマスターソン	東映テレビ映画 アラールの使者
	おねえさんといっしょ	ニュースフラッシュ	ニュースコープ	サンケイテレビニュース	NET ニュース
	今晚の番組から 天気予報	国際ニュース	TBSニュース まんがのレングデー・天気予報	とびだせファイリッパ 番組ニュース	
木	金太と三吉	まんがホームラン ガイド	いかすぞらビッド テレビガイド 番組ニュース	まんがの王さま・案内 つよいぞらフティ・案内	まんがデイクトルレーシー 子ども世界ニュース CM ローターリー・天気予報
	みんなのうた	ウッド・ベッカー	連続テレビ映画 冒険シリーズ	宝塚テレビ映画 竜巻小天狗	トリオで行こう
	おねえさんといっしょ	ニュースフラッシュ	ニュースコープ	サンケイテレビニュース	NET ニュース
	今晚の番組から 天気予報	国際ニュース	TBSニュース まんがのレングデー・天気予報	とびだせファイリッパ 番組ニュース	
金	にじ 虹に誓う	まんがホームラン ガイド	いかすぞらビッド テレビガイド 番組ニュース	まんがの王さま・案内 つよいぞらフティ・案内	まんがデイクトルレーシー 子ども世界ニュース CM ローターリー・天気予報
	みんなのうた	私の裏側	連続テレビ映画 冒険シリーズ	外国テレビ映画 わんぱくデニス	早稲ちマック
	おねえさんといっしょ	ニュースフラッシュ	ニュースコープ	サンケイテレビニュース	NET ニュース
	今晚の番組から 天気予報	国際ニュース	TBSニュース まんがのレングデー・天気予報	とびだせファイリッパ 番組ニュース	
土	まんが 宇宙家族	まんがホームラン ガイド	ボリドール歌のステージ	まんがの王さま・案内 つよいぞらフティ・案内	あしたの行状記 子ども世界ニュース CM ローターリー・天気予報
	たのしいうた	モーガン警部		外国テレビ映画 ローレンセンジャー	外国テレビ映画 可愛いアリス
	おねえさんといっしょ	ニュースフラッシュ	ニュースコープ	サンケイテレビニュース	NET ニュース
	今晚の番組から 天気予報	国際ニュース	TBSニュース まんがのレングデー・天気予報	とびだせファイリッパ 番組ニュース	
日	ポンポン大将 危険信号	ブの野球中継	時代劇 てなもんや三度笠	公開コメディ おけらの学校	サンデー 薄暮ナイター 東映一西映 南海 一大会
		テイタクアワー		公開ゲーム パイロットスター プレゼント	
		シャボン玉ホリデー	テレビ映画 織田信長		
	今晚の番組から 天気予報				

1964年4月

	NHK 総合	日本テレビ	TBS	フジテレビ	NET	東京12チャンネル	
月	まんがが学校 みんなのうた 今晚の番組から 幸福試験	まんががホームラン テレビガイド ドンドン道中記 ニュースフラッシュ	明星村の子劇場 テレビ映画 あ、無情 ニュースコープ TBSニュース まんがカレンダー、天気予報	プッチの冒険・案内 強いぞラフティ・案内 外国テレビ映画 走れチエス サンケイテレビニュース	まんがディックトレシー 子ども世界ニュース CMロータリー、天気予報 東映まんが 狼少年ケン NETニュース	朝日新聞ニュース 朝日科学ニュース ロッド・ロケット(第1編) フアンニ・カンパニー 天気予報 バラエティ 科学の絵本	
	火	次郎物語 みんなのうた 今晚の番組から 幸福試験	まんががホームラン テレビガイド テレビ映画 空飛ぶロックン'くん ニュースフラッシュ	まんが人形映画 伊賀の影丸 ニュースコープ TBSニュース まんがカレンダー、天気予報	プッチの冒険・案内 強いぞラフティ・案内 長編まんが映画 ゼロ戦はやと サンケイテレビニュース	まんがディックトレシー 子ども世界ニュース CMロータリー、天気予報 テレビ映画 走れ左源太 NETニュース	朝日新聞ニュース 朝日科学ニュース ロッド・ロケット フアンニ・カンパニー 天気予報 科学のおじさん 星を見つめて
		水	こちら わんぱくテレビ局 みんなのうた 今晚の番組から 幸福試験	まんががホームラン テレビガイド テレビ映画 空の勇者 ジェットジャクソン ニュースフラッシュ	テレビ映画 チョコマカ作戦 ニュースコープ TBSニュース まんがカレンダー、天気予報	プッチの冒険・案内 強いぞラフティ・案内 公開コメディ お笑い劇場 サンケイテレビニュース	まんがディックトレシー 子ども世界ニュース CMロータリー、天気予報 外国まんが映画 珍犬ハックル NETニュース
木	銀河少年隊 みんなのうた 今晚の番組から 幸福試験	まんががホームラン テレビガイド ウッドベッカー ニュースフラッシュ	テレビまんが エイトマン ニュースコープ TBSニュース まんがカレンダー、天気予報	プッチの冒険・案内 強いぞラフティ・案内 フジテレビ映画 天馬天平 サンケイテレビニュース	まんがディックトレシー 子ども世界ニュース CMロータリー、天気予報 外国テレビ映画 命しらすの スカイダイバー NETニュース	朝日新聞ニュース 朝日科学ニュース ロッド・ロケット フアンニ・カンパニー 天気予報 ビクターはてな放送局 (第1回)	
	金	星光る みんなのうた 今晚の番組から 幸福試験	まんががホームラン テレビガイド テレビ映画 冒険少年団 テリブルテン ニュースフラッシュ	テレビ映画 早射ちリンゴ ニュースコープ TBSニュース まんがカレンダー、天気予報	プッチの冒険・案内 強いぞラフティ・案内 外国テレビ映画 決死のヘリコプター サンケイテレビニュース	まんがディックトレシー 子ども世界ニュース CMロータリー、天気予報 外国まんが映画 早射ちマック NETニュース	朝日新聞ニュース 朝日科学ニュース ロッド・ロケット フアンニ・カンパニー 天気予報 外国テレビまんが 宇宙家族
土		歌の メロゴーラウンド みんなのうた 今晚の番組から 幸福試験	まんががホームラン テレビガイド テレビ映画 快傑ゾロ ニュースフラッシュ	テレビ映画 パンパの育児手帖 ニュースコープ TBSニュース まんがカレンダー、天気予報	プッチの冒険・案内 強いぞラフティ・案内 宝塚テレビ映画 まぼろし城 サンケイテレビニュース	あしたの行進隊 子ども世界ニュース CMロータリー、天気予報 外国まんが映画 ナッティ・ ドリームランド NETニュース	朝日新聞ニュース 朝日科学ニュース ロッド・ロケット フアンニ・カンパニー 天気予報 チエコの樹海 プラハの夢
	日	歌おう 世界の サーカス みんなのうた 今晚の番組から 天気予報	プロ 野球 中継 日曜薄暮ゲーム 東映-東京 シャボン玉ホリデー	時代劇 てなもんや三度笠 テレビ映画 高杉晋作	外国テレビ映画 徳方長者と結婚する法 公開ゲーム いじわるクイズ 時価1万円	サンデー 演舞 ナイター 南海 東映 一西鉄 サンデー 演舞 ナイター 東映 一西鉄 朝映 地獄の 高連道路	朝日新聞ニュース ガイド、天気予報 子ども映画館 君たちはどう生きるか いなかずみとまねおさん

『きょうのニュース』（19:00～30）に対抗してその前に放送されているが、TBSは午後6時台をすべて報道にしたのではなく、こども向けの『連続テレビ映画 冒険シリーズ』（月曜～金曜、18:15～30）も編成している。

これが64年4月になると、アメリカのテレビ映画が本数も減り殆どが他の時間帯に移行している。代わりにアニメーションの放送が一挙に増えている。

NHKは、午後6時台に『まんが学校』⁴¹⁾（月曜18:00～30）や人形劇とアニメーションを組み合わせた『銀河少年隊』（水曜18:00～30）などを編成し、その前の午後5時台に人形劇『ひょっこりひょうたん島』（月曜～金曜17:45～18:00、64.4～69.4放送）を配している。

一方、民放は8本のアニメーションを編成し、そのうちNETが4本を占めている。これを外国産か国産かで見ると、それぞれ4本で拮抗している。日本テレビが『ウッドベッカー』（木曜18:15～30）、TBSが『まんが人形映画 伊賀の影丸』（火曜18:00～30）と『テレビまんが エイトマン』（水曜18:00～30）、フジテレビが『長編まんが映画 ゼロ戦はやと』（水曜18:15～45）（『鉄腕アトム』は土曜19:00～30に移行）、NETが『東映まんが 狼少年ケン』『外国まんが劇場 珍犬ハックル』『同 早射ちマック』『同 ナッティ・ドリームランド』『同 どらねこ大将』（月・水・金・土18:15～45、日曜18:30～19:00）を編成している。

こうした外国産番組から国産番組への移行は、フジテレビの62年から64年の午後6時台の編成が典型的に示している（表5参照）。フジテレビの午後6時台のアメリカ・テレビ映画と日本のテレビ映画・アニメーションの数を比較すると、62年にはアメリカ・テレビ映画4本に対し日本のテレビ映画2本（新作のみで再放送は除く）であったのが、63年にはアメリカ・テレビ映画5本に対し国産のテレビ映画1本とアニメーション1本（『鉄腕アトム』）となり、64年にはアメリカ・テレビ映画が2本に減り、国産のテレビ映画3本と国産アニメーションが2本（『鉄腕アトム』『鉄人28号』）に増えて、外国産と国産の比が逆転している。ここにも、1962年から64年の短期間に起こった外国映画から国産テレビ映画と国産アニメーションへの変化が読み取れる。

このように1960年から64年までの午後6時台の編成を子細に検討すると、以下のことがわかる。第1に62年ごろから見られるアメリカ・テレビ映画の減少と国産のテレビ映画の増加、換言すれば“外国産から国産へ”という趨勢

表5 フジテレビの午後6時台の編成（1962年～1964年の4月）

	月	火	水	木	金	土	日	
62年	朝のワイド 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内	朝のワイド 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内	朝のワイド 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内	朝のワイド 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内	朝のワイド 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内	朝のワイド 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内	朝のワイド 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内 朝内	コメディ 一心茶坊
	専用スタジオ 宝塚テレビ映画 次郎長売り出す (再)	外国テレビ映画 ローレンジャー	外国テレビ映画 若い炎	外国テレビ映画 アニーよ腕をとれ	外国テレビ映画 犬大リンチ	宝塚テレビ映画 次郎長売り出す	外国テレビ映画 愛馬フリッカ	
	フジテレビニュース つよいぞろファイ	フジテレビニュース つよいぞろファイ	フジテレビニュース つよいぞろファイ	フジテレビニュース つよいぞろファイ	フジテレビニュース つよいぞろファイ	フジテレビニュース つよいぞろファイ	フジテレビニュース つよいぞろファイ	
63年	まんがの正さま・案内 つよいぞろファイ・案内	まんがの正さま・案内 つよいぞろファイ・案内	まんがの正さま・案内 つよいぞろファイ・案内	まんがの正さま・案内 つよいぞろファイ・案内	まんがの正さま・案内 つよいぞろファイ・案内	まんがの正さま・案内 つよいぞろファイ・案内	まんがの正さま・案内 つよいぞろファイ・案内	公開コメディ おけらの学校
	外国テレビ映画 アニーよ腕をとれ	長編まんが 鉄腕アトム	外国テレビ映画 バットマスターソン	宝塚テレビ映画 電巻小天狗	外国テレビ映画 わんぱくアニス	外国テレビ映画 ローレンジャー	公開ゲーム バイロットスター プレゼント	
	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	
64年	アッチの冒険・案内 つよいぞろファイ・案内	アッチの冒険・案内 つよいぞろファイ・案内	アッチの冒険・案内 つよいぞろファイ・案内	アッチの冒険・案内 つよいぞろファイ・案内	アッチの冒険・案内 つよいぞろファイ・案内	アッチの冒険・案内 つよいぞろファイ・案内	アッチの冒険・案内 つよいぞろファイ・案内	外国テレビ映画 億万長者と結婚する法
	外国テレビ映画 走れチヌ	長編まんが映画 ゼロ戦はやと	公開コメディ お笑い劇場	フジテレビ映画 天馬天平	外国テレビ映画 決死のヘリコプター	宝塚テレビ映画 まぼろし城	公開ゲーム いじわるクイズ 時価1万円	
	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	サンケイテレビニュース つよいぞろファイ	

のなかで『鉄腕アトム』の放送が始まったこと、第2にアメリカ・テレビ映画のブームのなかで増えた海外アニメーションの放送が国産アニメーションの放送への助走となったこと、第3に『鉄腕アトム』の放送以後は国産か海外かを問わずアニメーションの放送が急増し、特に後発局での放送本数が多かったこと、第4に『鉄腕アトム』開始の63年にはTBSとNETが国産アニメーションでフジテレビに追随していることである（図9参照）。

第4章 民放3局の編成方針と経営

前章では、『鉄腕アトム』の放送が始まった1960年代前半の日本のテレビ放送を編成と番組制作の面から考察し、「映画」の外国産から国産化への趨勢のなかで国産テレビ・アニメーションの放送が始まったこと、その背後に放送が映画産業を凌駕し支援産業として配して行く状況があったことを明らかにした。この章では、なぜフジテレビ、TBS、NETの3局が国産アニメーションの放送で先行したのかを考察する。

第1節 編成方針の違い

なぜフジテレビが最初に国産シリーズ・アニメーションを放送したのだろうか。また、なぜTBSとNETが追随したのか。その手掛かりは各局の編成方針と経営にあるように思われる。

	1963年												1964年												1965年											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
NH K 総合	銀河少年隊																								宇宙人ビビ											
日本 テレビ																									戦え!オスパー											
TBS													伊賀の影丸 鉄人28号												宇宙少年ソラン											
													エイトマン												オバケのQ太郎											
																									ビッグX											
																									スーパージェッター											
フジ テレビ	鉄腕アトム																								W3ワンダースリー											
													ゼロ戦はやと												遊星の少年パピイ											
	仙人部落																								宇宙エース											
																									ジャングル大帝											
NET													狼少年ケン												ハッスルパンチ											
																									風のフジ丸											

→ 放送終了 — 放送中

図9 国産アニメーションの放送

このうち、各局の編成方針については文献が乏しい⁴²⁾ため、社史などをもとに在京民放3局の編成方針を考察することにする。

まず、TBSはテレビ放送開始当初からドラマを中心に編成し、1960年代前半には自らを“民放の雄”と呼ぶようになる⁴³⁾。しかし、61年10月には後発局のフジテレビの視聴率の上昇に驚き⁴⁴⁾、視聴対象を明確にした1時間ごとの編成(“36年ワイド編成”)を組む。この編成は特にゴールデンタイムを重視

し、午後7時台はアメリカの青春ドラマやアニメーション（『名犬ラッシー』『ポパイ』など）を編成して“若者時間帯”、8時台は新作の1時間のアメリカ・テレビ映画（『ベン・ケーシー』『コンバット』など）を配して“ファミリー時間帯”、9時台はTBSが得意とするスタジオドラマ（『咲子さんちょっと』『七人の孫』『七人の刑事』『隠密剣士』など）を組んで“大人の時間”とした⁴⁵⁾。この新編成は専らゴールデンタイムに焦点を当て、午後6時台はそれほど考慮していないような印象を受ける。午後6時台の編成が変わるのは62年10月に30分の『ニューススコープ』を組んだ時で、TBSはこの時間帯を子ども向けと報道の時間帯にすることで特色を出そうとしたのではないだろうか。

TBSの最初の国産シリーズ・アニメーション『エイトマン』に関しては、61年ごろに当時の編成部長から「アニメーションをやれ」という指示があり『鉄腕アトム』の放送の1年前から企画を練ったという⁴⁶⁾。この証言からも、“民放の雄”という強い矜持のもとに新たな分野に挑戦するTBSの姿勢がうかがえる。この先発局としての自負が、TBSが国産アニメーションの放送を開始した主な要因ではないだろうか。

一方、後発局のNETは、教育専門局による番組編成の制約があるなかで、何よりも『ローハイド』『ララミー牧場』で得た“外画のNET”を編成の中心に位置付けている。午後6時台も他局より多くアメリカ・テレビ映画を放送し、これに続くゴールデンタイムと合わせて大半を“外画”で埋めている。加えて、変化への迅速な対応がNETの編成のもうひとつの特徴と思われる。この特徴はとりわけアニメーションの編成で際立っている。NETは、フジテレビが『鉄腕アトム』を始めた同じ63年の11月に『東映まんが 狼少年ケン』を開始し、翌64年度には4本の海外アニメーションを午後6時台に組み、『狼少年ケン』と合わせて1週間に5本のアニメーションを集中的に編成している。NETのこの集中編成は、視聴者に午後6時台をアニメーションの時間帯と印象付けるのに貢献したと思われる。

NETの最初の国産シリーズ・アニメーション『狼少年ケン』については、他局がアニメーションを放送しているのに、「(東映動画を傘下に持つ)東映が株主であるNETがやらないのはおかしい」という情勢のなかで、放送局では誰もがアニメーションの制作には無知で「採算が合うかわからないかわからないままに始まった」という⁴⁷⁾。このようにNETの場合は、資本的にも人的にも

つながりの深い東映との関係⁴⁸⁾が、国産シリーズ・アニメーションの放送開始に至った要因と考えるのが妥当だろう。

これに対して、フジテレビは、1962年12月に「(昭和)38年度編成3大方針」を系列6社の編成会議で明らかにしている。その骨子は、第1にお茶の間路線の確立、第2に番組の質的向上、第3に企画の獨創性であった⁴⁹⁾。このうち「お茶の間路線の確立」は“母と子のフジテレビ”とも形容され、いつからこの言葉が使われ始めたのか定かではないが、フジテレビの編成方針として繰り返し用いられている。たとえば、開局時から63年まで編成部長を務め後に専務取締役となった村上七郎氏は、「先発局に追いつき、追いこすためには、特色を出さなければならない。(中略)そのころ日本テレビはプロレスの力道山、プロ野球、TBSはドラマとコメディタッチの外国テレビが人気を集めていた。フジテレビはガラリと変わって“母と子のフジテレビ”でいくことにした⁵⁰⁾と述べている。また、村上氏の後任として75年まで編成部長を務め常務取締役となった片岡正則氏も、「当時の福田(英雄)編成局長の編成方針は“母と子のフジテレビ”」と証言している⁵¹⁾。

『鉄腕アトム』がフジテレビで放送されるにはそれなりの経緯⁵²⁾があったことは知られている。しかし、その基底には“母と子のフジテレビ”という編成方針と38年度編成3大方針のひとつ「企画の獨創性」、それに営業収入と視聴率で先発局を激しく追い上げていた後発局の勢いがあったと推測される。

第2節 経営格差

編成方針とともに、各局の経営も国産アニメーションの放送を開始するかどうかを決めるひとつの要素となったと思われる。

1960年代前半の在京民放局の経営を事業収入で見ると、いずれも折からの高度経済成長を背景に、65年度を例外として前年度比で10%から30%という極めて高い伸びを示している⁵³⁾(図10参照)。先発局の日本テレビとTBSの事業収入がほぼ拮抗しており、それを後発局のフジテレビが追い上げ64年度にはほぼ同水準に達している。一方、NETの事業収入はその半分程度である。ちなみに『鉄腕アトム』の放送が始まった63年度の事業収入は、日本テレビが売上高で約96億円、TBSが約102億円(うちテレビ事業収入は76億円)、フジテレビが営業収益で約91億円、NETが流動資産で約45億円⁵⁴⁾である。

単位: 億円

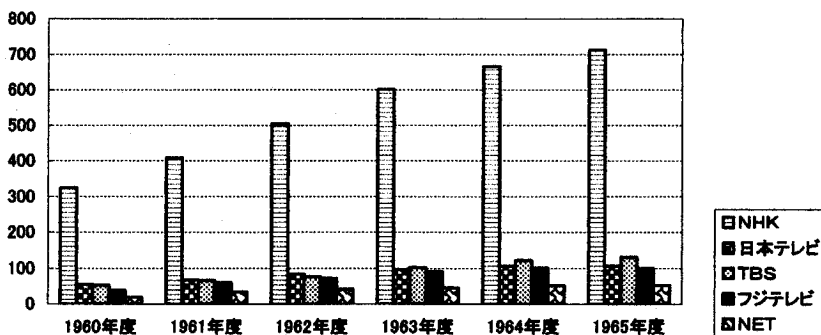


図10 放送事業者の事業収入

NETと他の3局との格差のひとつの原因は、NETが教育専門局であったことにあると考えられる。教育専門局は、57年2月に郵政省が策定した「テレビジョン放送用周波数の割当計画基本方針の一部修正」⁵⁵⁾(チャンネル・プラン)に基づいて新たに設けられたもので、免許条件として教育番組50%、教養番組30%以上の編成が義務付けられた⁵⁶⁾。NETの免許条件は教育53%以上、教養30%以上であった。これに対して、一般総合番組局は教育・教養番組30%以上が免許条件であった。NETは教育専門局という性格と「教育テレビ」という社名が経営を苦しめ、編成の重点とした学校放送番組で赤字が高み、それをほかの一般番組の収入で埋める状態が続いた。例えば、60年の学校放送番組の制作費は3億1,000万円だったが、その営業収入は9,300万円で、赤字額の2億8,000万円はNETの1か月の営業収入にも匹敵した。また、開局した59年7月のゴールデンタイムの週平均視聴率は5%台に低迷し、同年度上半期の営業収益は約8億円、当期利益は約5,000万円に止まった⁵⁷⁾。このため、NETは『ローハイド』や『ララミー牧場』などのアメリカ・テレビ映画を積極的に編成して“外画のNET”という評判を得て、ようやく60年度下半期から目標としていた月間営業収入2億円を上回った。

在京民放局の視聴率も各局の経営状態を反映しているようである。62年12月から始まったビデオ・リサーチ社の調査によると、63年から65年の4月の関東地区のゴールデンタイムと全日(午前6時から午後12時)の平均視聴率は、後発局のフジテレビが先発局の日本テレビとTBSを追い上げているが、

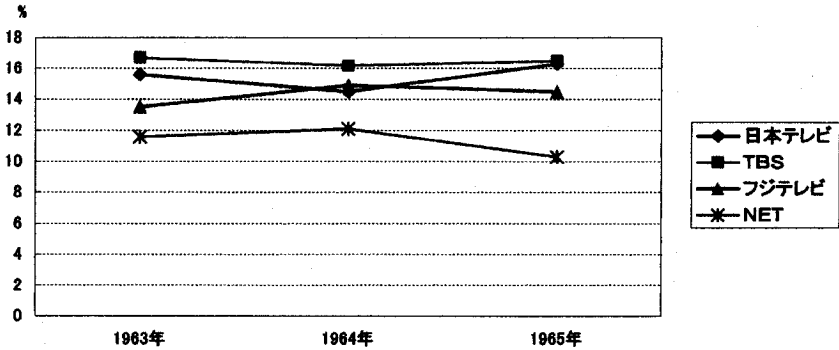


図 11 在京民放局のゴールデンタイムの平均視聴率（4月、関東地区）

NETの視聴率は3局との間にかなりの差がある（図11参照）。

こうしたフジテレビの上昇機運と先述した編成方針が『鉄腕アトム』の放送を推進し、逆にNETが置かれた苦境が『狼少年ケン』の放送を実現させ、TBSの先発局としての自負が『エイトマン』の放送に繋がったのではないだろうか。

第5章 アニメーション製作業の組み込み

前章までは初期の国産シリーズ・アニメーションが放送されるまでの経緯を編成、番組制作、経営の観点から見てきた。この章では逆にアニメーション製作の面から放送との関係や番組提供料などについて考察する。そのひとつの手がかりとして、1本55万円と言われた『鉄腕アトム』の放送権料を取り上げることにする。

第1節 放送とアニメーション製作業

手塚治虫氏は、自著の『ぼくは漫画家』のなかで、『鉄腕アトム』の放送権料⁵⁸⁾が決まったいきさつを次のように綴っている。

手塚氏はまず、将来スポンサーに決まる明治製菓の担当者に「『五五万ぐらいです。三十分のもので』と言うと、M製菓の人は目をむいて、『そんなもんですか!』と安心した」と記している。そして「ばかみたいな安値である。だが、これには訳があった。当時、普通のテレビ映画の製作費が四、五十万円で、漫

画映画だけがそれから飛び離れて高ければ、とてもスポンサーがよりつかないだろうという思案がひとつ。それに、うんと安い製作費を発表しておけば、とてもよそでは、それだけではできないだろう—という計算をたてたぼくは、心で泣いて、赤字覚悟でこう言ったのだ」と続けている⁵⁹⁾。

この額は1本75万円⁶⁰⁾とも言われているが、後述する理由から1本55万円が正確ではないかと思われる。「当時、普通のテレビ映画の製作費が四、五十万」という手塚氏の記述も、当時の在京民放局の午後6時台の番組提供料（タイム料金と呼ばれる）とほぼ照合する。あるいは、55万円は番組提供料の基本料金、75万円は系列局で放送する場合に加算されるネット料金を上乗せした額かも知れない。

当時は30分のアニメーション1本の製作費は250万円⁶¹⁾とも言われていた。このため、手塚氏は「余りに安い製作費（放送権料）で受注してアニメーション業界を苦境に陥れた」という非難をその後長く浴びることになる。しかし、手塚氏が極めて現実的な判断をしていることも事実で、放送権料は結局のところ放送局の番組提供料の範囲内に納まったのではないかと考えられる。こう考えるのは次の3つ理由からである。第1に当時のアニメーション製作は未だ揺籃期にあり放送と対等な関係を保つのが困難であったと考えられること、第2にアニメーションは放送以外の商品化などによる収入を期待できることから放送局はアニメーションの製作費がほかの番組より割高であったにもかかわらずあえて番組提供料の範囲を逸脱するまでに至らなかっただろうと推測されること、第3に国産シリーズ・アニメーションの放送が初めてであったため番組提供料以外に放送権料を決める妥当な基準が見出しがなかったと思われることである。

このうち、1960年前半の日本のアニメーション製作業について概観すると、企業としては56年7月に日動映画社を吸収して設立された東映動画と62年1月に手塚治虫氏が設立した虫プロダクションがあったが、そのほかには55年1月ごろ漫画家の横山隆一氏が自宅に小さなスタジオを設けて作ったおとぎプロダクションや62年10月に漫画家の吉田竜夫が設立した竜の子プロダクションが目立つ程度で、ほかはアニメーション制作に熱意を燃やす個人やグループが細々と制作している状態であった。

このうち東映動画は最大のアニメーション製作会社で、『鉄腕アトム』が放

送される63年までに『白蛇伝』(58. 10 公開)、『少年猿飛佐助』(59. 1)、『西遊記』(60. 8)、『安寿と厨子王丸』(61. 7)、『アラビアンナイト シンドバッドの冒険』(62. 7)、『わんぱく王子の大蛇退治』(63. 3)と6本の劇場用長編アニメーションをカラーで製作していた。東京・大泉に動画スタジオを構え、従業員も56年7月の設立時の23人から63年2月には450人に増えている⁶²⁾。

一方、虫プロダクションは、文字どおり手塚治虫氏が私財を投じて設立したもので、東京・練馬の手塚氏の自宅に近接してスタジオを設けた。虫プロダクションは、『鉄腕アトム』の放送直前の62年11月に中編アニメーション『ある街角の物語』を発表しているが、そのころの従業員数は38人であった⁶³⁾。そのうち作画部門は、大半が東映動画やおとぎプロダクションからの移籍組で占められていた。

『鉄腕アトム』の成功に刺激されて1960年代後半にはプロダクションが乱立して一斉にテレビ・アニメーションの製作に参入するが、日本のアニメーション業界は1960年代を通じて就業人口も売り上げも小規模であった。こうした当時の日本のアニメーション製作業の状況と既に産業として形成されつつあった放送との間の格差は否定しがたく、そうした客観的な状況が『鉄腕アトム』の放送権料を決める最大の要因として働いたのではないかと考えられる。また、放送産業との格差と揺籃期という状況であったがゆえに、1960年代前半のアニメーション製作業は放送に組み込まれることによって成長する道を選んだのではないと思われる。

第2節 放送局・広告代理店・アニメーション製作会社の関係

民放のアニメーションの製作と放送に関しては、放送局・広告代理店・アニメーション製作会社の3者間で様々な関係が成り立つ。まず、放送局とアニメーション製作会社が直接契約を結ぶ場合がある。この場合は、放送局が放送権料を製作費という名目でアニメーション製作会社に支払う。次に、アニメーション製作会社が広告代理店と契約を結ぶ場合がある。この場合は、アニメーション製作会社は広告代理店から製作費の支払いを受ける。

契約の形態は、著作権の保有の仕方に応じて異なる。大別すると、アニメーション製作側が著作権を保有してそのうちの放送権だけを売却する形態(放送権契約)とアニメーション製作側が著作権を保有せず制作業務の委託を受ける

形態（業務委託契約）の2つがあり、これらを組み合わせた形態も存在する。

また、放送局と広告代理店との関係には2つのタイプがある。第1は広告代理店がスポンサーを見つけ放送局に番組の企画とともに提示するかたち（いわゆる“持ち込み型”、スポンサー自らが企画を広告代理店に持ち込む型⁶⁴もある）、第2は放送局が企画を立て広告代理店にスポンサーの選考を依頼するかたち（いわゆる“編成主導型”）である。

『鉄腕アトム』は、広告代理店の宣弘社が明治製菓をスポンサーにしてフジテレビに企画を持ち込み、虫プロダクションが著作権を保有してフジテレビと契約を結び放送権料の支払いを受けた。『狼少年ケン』はNETが企画を立て電通が広告代理店となって森永製菓をスポンサーにし、東映動画が著作権を保有してNETと製作業務委託契約を結んだ。『エイトマン』も持ち込み型で、旭通信社を広告代理店、丸美屋食品工業をスポンサーとして、著作権はTBSが保有して旭通信社がテレビ・コマーシャル製作の大手のテレビジョン・コーポレーション・オブ・ジャパン（TCJ、現在のエイケン）と契約した。

このように初期の3作品だけでも著作権の保有や契約関係がそれぞれ異なっているが、これは著作権から派生する商品化権（マーチャンダイジング）、海外放送権、ビデオ化権、出版権などによって多額な収入が得られることが原因である。特に商品化権は、アニメーションに登場するキャラクターを付けた商品がヒットすれば、莫大な収入を生む可能性がある。現に『鉄腕アトム』は、種々な商品でマーチャンダイジングを展開して収入を上げた。このため、製作会社も放送局もともに著作権の保有を図り、特に製作会社は著作権を保有して放送権料の不足をマーチャンダイジングや輸出で補おうとする。また、放送局は、製作会社が著作権を保有する場合には商品化などで得られる製作会社の収入を予め予測してその分だけ放送権料を下げる傾向がある。『鉄腕アトム』の放送権料の設定も後者のケースに該当するのではないだろうか。

第3節 番組提供料と製作費

民間放送局の収入は、スポンサーが提供する番組提供料（一般的にタイム料金、放送局によっては放送料、電波料と呼ばれる）と番組と番組との間に流されるスポット・コマーシャル料（スポット料金⁶⁵）に大別される。両方とも、曜日、時間帯、放送時間に応じて料金が異なり、放送局によって料金や料金体

系に差がある。時間帯では視聴者が最も多いゴールデンタイムの料金が高く、視聴率が高い放送局の料金が低い。また、放送する放送局数に応じてネット料金が加算される。

ここでは『鉄腕アトム』の放送が始まった1963年の日本テレビ、TBS、NETの3局の番組提供料(表6参照)を比較してみる⁶⁶⁾。日本テレビとTBSは63年5月、NETは同年10月に料金を改定している。3局の平日の料金体系を見ると、3局ともゴールデンタイムの午後7時から10時まで(NETは午後10時30分まで)を「A」として最高の料金を設定し、その前後の午後6時30分から7時(日本テレビは午後6時から)と午後10時から10時30分を「特B」として2番目に高い料金、午後12時から12時30分(NETは2時まで)と午後6時から6時30分まで(日本テレビは午後5時30分から午後6時)を「B」として3番目に高い料金を提示している。

これを初期の国産シリーズ・アニメーションが放送された平日の午後6時台の30分の料金を調べると、日本テレビが午後6時から7時で50万円、TBSが午後6時30分から7時まで45万円、その前の30分間が30万円、NETが午後6時から7時で48万円となっている。フジテレビは3社と同じ63年10月に料金を改定しているが、「Aタイム30分60万円」⁶⁷⁾としか記載していない。他局の「A」料金と「特B」料金の比率が約80%であることから計算すると、フジテレビの午後6時台30分の料金は45万円程度ではないかと考えられる。このように、1963年の平日午後6時台の番組提供料は平均して50万円程度と考えられる。この額は基本料金であり、同一番組を放送する放送局の数に応じてネット料金が加算される。

この平均50万円程度の番組提供料とネット料金の合計額が、民放局が国産アニメーションの放送権料を決める際の基準となったと思われる。

それを裏付けるように、手塚治虫氏が自著で述べている『鉄腕アトム』30分1本の放送権料55万円という額は、当時の在京民放局の午後6時台の番組提供料とほぼ一致する。

また、今回の取材によって、『鉄腕アトム』放送権料が初期の国産アニメーションの基準になっていることがわかった。TBSの『エイトマン』は「他の(午後6時台の)番組より高かった」。また、NETの『狼少年ケン』は「55万円プラスアルファ」「55万円より高いが100万円には達しない」ということ

表6 在京民放局の番組提供料の体系と料金

日本テレビ

タイム料金時間区分 (1963年5月1日)

D	B	特B	A	特B	B
16	17:30	18	19	22	22:30 23

タイム料金

(単位:円)

時間枠	A	特B	B	C	D
30分	600,000	500,000	390,000	247,500	202,500

TBS

タイム料金時間区分 (1963年5月1日)

D	B	特B	A	特B	B
16	18	18:30	19	22	22:30 23

タイム料金

(単位:円)

時間枠	A	特B	B	C	D
30分	600,000	450,000	300,000	240,000	180,000

NET

タイム料金時間区分 (1963年10月1日)

D	C	特B	A	特B
16	17	18	19	22:30 23

タイム料金

(単位:円)

時間枠	A	特B	B	C	D
30分	600,000	480,000	360,000	270,000	180,000

であった⁶⁸⁾。いずれも、実際の製作費をはるかに下回る額である。

製作費と放送権料の差は、『鉄腕アトム』ではマーチャンドアイジングと輸出、それに手塚氏が私財を投入して補填に努めた。また、『狼少年ケン』を製作した東映動画は、マーチャンドアイジングと東映本社の「アニメーションは東映の良心という鷹揚さ」⁶⁹⁾に救いを求めた。

製作費と比べて圧倒的に低く設定された放送権料と商品化などによる放送以外の収入を頼りにそれを受容した当時のアニメーション業界。初期の国産アニメーションに見られるこの関係が、「マーチャンドアイジングの収入を期待できないアニメーションの放送は困難」あるいは「アニメーションの放送は商品化のための長時間のコマーシャル」と言われる今日の日本のテレビ・アニメーションの原型を形成したのではないだろうか。このことはまた、日本のアニメーション業を過度な放送依存型にするきっかけにもなったとも考えられる。

第5章 むすび

本論では、概略以下のことを述べた。まず、放送は、テレビ放送という新しい媒体を得て高度経済成長を背景に1960年代前半に小さい規模ながらも新しい産業として自立する。その過程で、放送は、最後まで容易に国産化できなかった「映画」を他の映像産業を周辺に配置することによって可能にする。

これを編成で見ると、1950年代後半から60年代前半にかけてアメリカ・テレビ映画が氾濫するが、60年代半ばにはそれが日本の映画産業の方針転換によって国産テレビ映画によって代替されてゆく。それはまた、新興の放送が収入規模で映画産業を乗り越え、国産テレビ映画の発注をとおして映画産業を支援産業化することを意味している。

一方、アニメーションの分野でも、アメリカ・テレビ映画のブームの延長として60年代初めに海外アニメーションの放送が隆盛となり、それを助走として63年以降国産シリーズ・アニメーションが登場し、僅か数年で海外アニメーションを駆逐する。しかし、揺籃期にあった日本のアニメーション製作業は、製作費をはるかに下回る番組提供料という放送の基準を受容することによってテレビ放送への参入を果たし、逆に放送への依存度を高める結果を招いた。

このように、『鉄腕アトム』の放送は、1960年代前半の編成や番組制作の趨勢の象徴であり、放送という新興産業の形成過程のひとつの里程標でもあったと考えられる。

むすびにあたって、『鉄腕アトム』の放送が始まった年とその翌年に起こった2つの出来事を記しておく。ひとつは、1963年2月、『鉄腕アトム』の放送開始から1か月後に、日本最大のアニメーション製作会社東映動画が従来の映画製作部を分割して長編漫画製作部とテレビ漫画製作部を新設し、劇場用アニメーション製作に専念していた従来の方針を転換して「テレビアニメの製作体制を本格的に整えた」⁷⁰⁾ことである。

もうひとつは、翌1964年11月に東映社長の大川博氏がNETの社長を突然辞任したことである。辞任の理由のひとつは、「映画界、興行界の業績が極度に悪化し、深刻な事態に追い込まれ、大川博社長は自らその再建に専念するためいったんテレビ界から身を引く必要があった」⁷¹⁾からである。

どちらもがテレビ放送に深くかかわる出来事で、1960年代前半における放

送と映画産業、その外延としてのアニメーション製作業との関係を凝縮して
るように思える。

注

- 1) 電通総研編 2003『情報メディア白書 2004』p. 96。2003年7月27日～8月2日、関東地区。
- 2) 小学館の資料による（2000年9月）。
- 3) 電通総研編 2002『情報メディア白書 2002』および財団法人デジタルコンテンツ協会 2002『デジタルコンテンツ白書 2002』。
- 4) 韓国文化スポーツ省 1996「ソウル韓国アニメフェスティバル資料」。
- 5) アニメーションの振興に関しては、経済産業省が2002年6月に『アニメーション産業研究会報告書～製作プロダクションによる自立したビジネスの確立に向けて～』、2003年7月に『コンテンツ産業国際戦略研究会中間とりまとめ』、日本経済団体連合会が2003年11月に意見書『エンターテインメント・コンテンツ産業の振興に向けて』を発表している。また、東京都杉並区は2003年度（平成15年度）から8ヵ年計画として「アニメーション産業の発展支援」事業を実施している。
- 6) 「メディア芸術祭」は文化庁が主催して1997年度（平成9年度）から毎年度開催されている。アニメーションを含む4部門で作品を募集し、優れた作品に大賞、優秀賞、奨励賞と賞金を授与している。
- 7) フランスの映像産業政策については、内山隆・湧口清隆 2001「経済政策としての映像ソフト振興策—フランスの事例—」『メディア・コミュニケーション No. 51』慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所を参照されたい。
- 8) 1917年（大正6年）に天然色活動写真株式会社が製作した『芋川椋三玄関番の巻』が最初の作とされている（『日本アニメーション映画史』p. 9）。
- 9) 1960年（昭和35年）11月、九里洋二、柳原良平、真鍋博による「アニメーション三人の会」が東京・港区の草月ホールで第1回発表会を開いた。これがアニメーションという言葉を広く一般に向けて使った始まりと言われている。
- 10) 世界名作劇場シリーズ（1973. 1～95. 6、24シリーズ、フジテレビ系で放送、『アルプスの少女ハイジ』『あらいぐまラスカル』ほか）や『ちびまる子ちゃん』（90. 1～、フジテレビ系で放送）などを製作。
- 11) アニメーション研究団体として「日本アニメーション学会」がある。この学会は、1998年8月、前年12月に起きた『ポケットモンスター』視聴による障害の発生に研究団体として対応するかたちで、映像研究者、心理学研究者、アニメーション業界の関係者らが参加して設立された。

- 12) 例えば、Napier, J. Susan 2001 *ANIME form Akira to Princess Mononoke: Experiencing Contemporary Japanese Animation* Palgrave Macmillan (神山京子訳 2002『現代日本のアニメ「AKIRA」から「千と千尋の神隠し」まで』中央公論社)、津堅信之 2004『日本アニメーションの力～85年の歴史を貫く2つの軸』NTT出版などが挙げられる。
- 13) 『鉄腕アトム』の放送以前に、1962年6月から64年6月まで『おとぎカレンダー』(312話)がKRT系で放送されている。1本1分20秒の短編のシリーズで、おとぎプロダクション(漫画家の横山隆一が鎌倉の自宅に小さなスタジオを設けて1955年に設立し72年に解散)が製作した。このシリーズは、それ以前の61年5月から62年2月にフジテレビ系で放送された『インスタント・ストーリー』と同一作品と推定されているが、両者の関係は明らかでなく、記録も残っていない。このため、30分193話の『鉄腕アトム』を日本で最初の本格的なシリーズ・アニメーションとするのが通説である。
- 14) 日本テレビは、かなり遅れて1962年に初めて『戦え!オスパー』(65.12～67.10、53話)を放送した。日本テレビの社史『大衆とともに25年』は「NTVは立ち遅れ、(『鉄腕アトム』の放送開始)5年後の(昭和)43年に読売テレビ制作『巨人の星』、さらに読売テレビ制作『タイガーマスク』の出現を待たなければならなかった」(p.155)と記しているが、日本テレビが放送した最初の国産シリーズ・アニメーションは上記の『戦え!オスパー』とするのが正確であろう。
- NHKも、人形劇とアニメを組み合わせた『銀河少年隊』(63.4～65.4、92話)と実写とアニメを合成した『宇宙人ピピ』(65.8～66.3、52話)の2本の実験的な作品を除いて国産シリーズ・アニメーションを放送してこなかったが、78年10月に初めて『未来少年コナン』(～79.3、26話、日本アニメーション製作、宮崎駿演出)を放送した。
- 15) 通常、劇場用アニメーションは、1枚の動画を1秒間24枚の画像で撮影(フィルムの一コマコマごとに撮影することから「一コマ撮り」、フルアニメーションと言われる)しているため、動きが滑らかである。これに対し、テレビ・アニメーションは、ほとんどが「三コマ撮り」で画像を1秒間8枚にしている(リミテッドアニメーション)ため、動きがぎくしゃくする。
- 16) 『TBS50年史』p.196および『20世紀放送史』上巻p.518。
- 17) 例えば『20世紀放送史』がこの時代区分を採っている。
- 18) 日本電子機械工業会の調査による。
- 19) 『NHK年鑑』1954～60年版およびテレビラジオ新聞編1970『日本のテレビジョン20年』による。

- 20) 民間放送の収入に占めるテレビ営業収入の割合は、55年度は4.2%に過ぎなかったが、60年度には45.1%、65年度には55.8%に達している。
- 21) 1957年の田中角栄郵政相のテレビ局大量予備免許に関して、当時事務次官を務めた小野吉郎元 NHK 会長は「テレビ局の大量免許が電機メーカーに対する受像機の需要を喚起し、それが量産体制と輸出競争力の強化につながって、大きく日本の経済成長に寄与するに違いないというビジョンがあった。そうした意見をしばしば聞かされた記憶がある」と証言している（『ドキュメント 放送戦後史 I』p. 290）。
- 22) 1960年にJNN（Japan News Network；KRT系16社）、66年にNNN（Nippon News Network；日本テレビ系19社）とFNN（Fuji News Network；フジテレビ系基幹6社）、70年にANN（All Nippon News Network；NET系14社）がニュース交換協定に基づいて発足した。
その後、74年4月に全国紙1社だけが在京キー局1局とその系列局の株式を保有する「新聞単一提携」が完了した。また、91年にTXN（TX News Network；テレビ東京＝日本経済新聞系、3社）が発足した。
- 23) 1960年にアメリカのA. C. ニールセン社が日本に進出して翌61年から関東地区300世帯を対象に機械式の世帯視聴率調査を始めた。また、翌62年9月には電通、東芝、民放24社の出資によってビデオ・リサーチ社が設立され、12月から都内23区の246世帯を対象に同様な調査を開始した。両社の調査は、その後関西・中京地区に拡大した。
- 24) 2002年度の就業人口はNHK 1万2,077人、民放で2万7,352人。地上波放送事業者の数は204、委託放送事業者を入れると約500となる。
- 25) 日本テレビ：『ボナンザ』（19:00～20:00）『パパは何でも知っている』（20:30～21:00）、TBS：『ブロンコ・シャイアン』（19:00～20:00）、
フジテレビ：『アイ・ラブ・ルーシー』（19:30～20:00）『チェックメイト』（20:00～21:00）『パリ指令』（21:45～22:15）。
NET：『ニューブリード』（20:00～21:00）『マイアミの戦慄』（21:15～45）。
- 26) フジテレビで開局当時から編成局長を務め後に副社長となった福田英雄氏は、「年間6回くらい、アメリカのプロダクションを訪ねた。面白いテレビ映画を見つけ、それを買うことが編成局長の腕だと言われた」と回想している（『タイムテーブルから見たフジテレビ40年史』p. 8）。
- 27) 日本テレビは『ジャングルジム』第11話（56.10.27）、KRTは『スーパーマン』第1話（56.11.3）から日本語の吹き替えを放送した。
- 28) 『日本のテレビ編成』p. 113。
- 29) 『日本放送史』下巻p. 546および『大衆とともに25年』p. 86。

- 30) 『20世紀放送史』上巻 p. 390。
- 31) 56年度は『漫画、天気予報、かっぱ川太郎』(19:00～15)、57年度から59年度は『番組のお知らせ、漫画映画』(17:50～18:00)、60年度は『ニュース・NHKだより・漫画映画』(17:50～18:00)、61年度は『子どもニュース・まんが』(17:35～45)、62年度は『まんが』(17:50～18:00)となっている。
- 32) 『NHK年鑑』1958～62年版および『NHK総合テレビ放送番組確定表』1958年1月～62年9月(NHK放送文化研究所保存)をもとに調査。
- 33) 『大衆とともに25年』『TBS50年史』『タイムテーブルからみたフジテレビ35年史』『テレビ朝日社史』をもとに調査。
- 34) *The Encyclopedia of Animated Cartoon Second Edition, Fifty Years of Television, Encyclopedia of Television*をもとに調査。
- 35) NBC、CBS、ABCなどのネットワークに属さない複数の放送局の連合体に対して番組を供給し放送する仕組み。
- 36) たとえば、NHK総合テレビでは1953年度に午後7時から15分間『映画』を毎日放送していたが、その内容はNHKニュース、海外から購入したムービータイムズとワールドニュース、東京都や静岡県など地方自治体が製作したニュース、内外の短編映画、それに国産と推定されるアニメーションから構成されていた。これは、NHKが自前のフィルム・ニュースを製作する能力を備えていなかったための措置で、カメラマンの各局への配置と現像施設の整備が進むと、フィルム・ニュースは54年度から「映画ニュース」、55年度からは「ニュース」に名前を変えている。しかし、このほかのフィルム番組は「映画」と表記され、アニメーションは「漫画映画」、NHKが55年度から本格的に製作する短編フィルムは「短編映画—NHK製作」と表記された。フィルム番組が『社会探訪』などの独自の番組名を付すのは54年度後半、アニメーションが「まんが」となるのは61年度からである。
- 37) 日本テレビは1962年10月に編成局に映画放送部を新設、NETは63年1月に編成局にあった制作部門をスタジオ番組とフィルム番組に分け映画局を置き、TBSも63年7月に従来のテレビ編成局映画課を映画制作部に昇格した。
- 38) 『大衆とともに25年』は、「64年10月には外国映画63本に対し国産テレビ映画は53本を数えた。国産テレビ映画は1時間ものが多く、放送時間合計で両者はまったく同じ2220分で、外国テレビ映画と対等の地位に立った」(p. 145)と記している。
- 39) 日本テレビ：『モーガン警部』(火曜・土曜18:15～45)『大海賊バイキング』(木曜 同時間)。

TBS：『ウィリアム・テル』『がんばれキャノンボール』『ラマ・オブ・ジャング

ル』『警察犬キング』『ヒューリーとベレル少年』（水・日を除く 18:15～45）。

フジテレビ：『ローンレンジャー』『アニーよ銃をとれ』『名犬リンティ』『愛馬フリッカ』（火曜・木曜・金曜・日曜 18:15～45）。

NET：『サーカスポーイ』（金曜 18:15～45）、『ハーバーコマンド』（日曜 18:00～30）『ハイウェーパトロール』（同 18:30～19:00）。

40) *The Encyclopedia of Animated Cartoon Second Edition*によると、アメリカのスクリーン・ジェム社製作の30分シリーズ。スクリーン・ジェム（Screen Gems）はコロンビア・ピクチャーズのテレビ部門で、コロンビアが1930年代から40年代に製作した『クレイジー・キャッツ』『スクラッピー』やヴァン・ボーレン製作の『トムとジュリー』などの権利を56年に購入した。

41) NHKが放送した『まんがが学校』（63.4～66.3放送）はアニメーションではなく、落語家の立川談志を司会、漫画家のやなせたかしを先生に、スタジオに子どもたちを招いてまんがのかき方や漫画でクイズを解く番組であった。NHKの以前の番組には『まんがくらぶ』（55.4～57.3放送）があるが、これもアニメーションではなく、杉浦幸雄、宮尾しげを、和田義三らの漫画家が出演するクイズ番組であった。

42) 毎年度の編成方針が掲載されているのは『NHK年鑑』だけである。

43) 『TBS 50年史』 p. 186。

44) 『TBS 50年史』 p. 188。

45) 『TBS 50年史』 p. 189。

46) 三輪俊道氏への取材（2004年8月13日）。

47) 宮崎慎一氏への取材（2004年9月6日）。

48) 東映は、NETの開局に際して、主要株主として出資したばかりでなく、大川博氏が社長を兼務し多くの役職員がNETに移籍した。

49) 『フジテレビ社史年表』 p. 25。

50) 『タイムテーブルから見たフジテレビ40年史』 p. 16。

51) 『タイムテーブルから見たフジテレビ40年史』 p. 24。

52) 『ほくは漫画家』『虫プロ興亡記』に詳しい。また、東映動画に勤める兄を持つフジテレビの編成部員がいち早く情報を得て、それがきっかけとなって幹部が『鉄腕アトム』を放送する決断をしたという話もある。

53) 東京12チャンネル（現在のテレビ東京）は、1964年4月に開局したばかりなので除外した。

54) NHKは『NHK年鑑』1963年版、日本テレビは『テレビ夢 50年 データ編』、KRTは『TBS 50年史 資料編』、フジテレビは『フジテレビ社史年表』（第11、12回株主総会の営業収益を合計）、NETは『テレビ朝日社史』による。

- 55) このチャンネル・プランは、周波数を11チャンネルに増やし全国にテレビ放送局を置局する方針を打ち出し、教育・教養放送を重視したことが特徴である。「総合的な番組を放送するもののほか、学術、技芸、職能教育など、専ら教育的効果を目的とする放送を行う局の設置を、必要かつ適当とする場合においては、その実施を可能にするごとく考慮する」と記している。
- 56) 郵政省は教育専門局のほかに準教育専門局（教育20%、教養30%以上）を設けた。読売テレビ（58.8開局）、毎日放送（59.3）、札幌テレビ（59.4）がこれに当たった。準教育局は69年11月の再免許の時に廃止された。一方、教育専門局のNETと東京12チャンネルは、73年11月の再免許に際して一般総合番組局となった。
- 57) 『テレビ朝日社史』p. 54およびp. 73。
- 58) 虫プロダクションとフジテレビの契約は、前者が著作権を保有し後者に放送権を売却する形態なので、放送権とするのが正確である。
- 59) 『ぼくはマンガ家』p. 242。
- 60) 山本瑛一『虫プロ興亡記』p. 94。この著書は小説だが、著者はあとがきで「仕事に関する部分は、ほとんどが事実である」（p. 367）と記している。
- 61) 『虫プロ興亡記』p. 94。
- 62) 『東映動画40年の歩み』p. 40。
- 63) 『虫プロ興亡記』p. 74。『日本アニメーション映画史』は20人（p. 161）としている。
- 64) たとえば、東映動画の第2作『少年忍者 風のフジ丸』（1964. 6～65. 6 NET系で放送）は、スポンサーの藤沢薬品が企画を持ち込んだ。そのため、タイトルはスポンサーの社名をとって「フジ丸」となった。
- 65) 1960年代までは番組提供料の比重が高かったが、70年代に入ってスポット・コマース料が番組提供料を上回るようになり、現在はスポットが約60%、番組提供料が約40%である。
- 66) 日本テレビは『テレビ夢 50年 データ編』、TBSは『TBS 50年史 資料編』、NETは『テレビ朝日社史』による。フジテレビは『フジテレビ社史年表』に簡単な記述しかない。
- 67) 『フジテレビ社史年表』p. 24。
- 68) 三輪俊道氏、宮崎慎一氏、有賀健氏への取材。
- 69) 有賀健氏への取材（2004年9月29日）。
- 70) 『東映動画40年の歩み』p. 8
- 71) 『テレビ朝日社史』p. 111。

引用文献

- 株式会社東京放送編 2002 『TBS 50年史』
- 株式会社フジテレビジョン総務部編 1992 『フジテレビ社史年表 開局からの歩み』
- 株式会社フジテレビジョン編成局調査部編 1994 『タイムテーブルからみたフジテレビ 40年』
- 全国朝日放送株式会社社史編纂室編 1984 『テレビ朝日社史 ファミリー視聴の25年』
- 手塚治虫 1969 『ぼくはマンガ家』 毎日新聞社
- 東映動画株式会社編 1996 『東映動画 40年の歩み』
- 日本テレビ放送網株式会社社史編纂室編 1978 『大衆とともに25年』
- 日本テレビ放送網株式会社社史編纂室編 2004 『テレビ 夢 50年』
- 日本放送協会編 『NHK年鑑』 1954～66年版 日本放送出版協会
- 日本放送協会編 1965 『日本放送史』 日本放送出版協会
- 日本放送協会編 2001 『20世紀放送史』 日本放送出版協会
- 日本放送協会総合放送文化研究所編 1976 『放送学研究 28 日本のテレビ編成』 日本放送出版協会 (図表、注では『日本のテレビ編成』と略記)
- 日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編 1976 『テレビ番組の変遷—東京7局 テレビ番組対照表—』 日本放送出版協会 (図表では『テレビ番組の変遷』と略記)
- 松田浩 1980 1981 『ドキュメント 戦後放送史 I』『同 II』 双柿舎
- 山口且訓、渡辺泰 1977 『日本アニメーション映画史』 有文社
- 山本英一 1989 『虫プロ興亡記 安仁明太の青春』 新潮社

参考文献

- Lenburg, Jeff 1999 *The Encyclopedia of Animated Cartoon Second Edition* Checkmark Books
- Napier, J. Susan 2001 *ANIME form Akira to Princess Mononoke: Experiencing Contemporary Japanese Animation* Palgrave Macmillan
(神山京子訳 2002 『現代日本のアニメ「AKIRA」から「千と千尋の神隠し」まで』 中央公論社)
- TV Guide Groups 2002 *Fifty Years of Television* Crown Publishers
- Museum of Broadcast Communications 1997 *Encyclopedia of Television* Fitzroy Dearborn Publishers
- アニメージュ編集部編 1989 『TVアニメ25年史』 徳間書店
- 津堅信之 2004 『日本アニメーションの力～85年の歴史を貫く2つの軸』 NTT出版

取 材

本論を執筆するにあたり、以下の方々に取材した。名前を記して感謝したい。

- 有賀 健氏（元東映動画副社長、2004年9月29日）
 池内 辰夫氏（元虫プロダクション専務、2004年9月1日）
 大西 清氏（元TCJ、『エイトマン』の制作担当、2004年8月24日）
 月岡 貞夫氏（元東映動画、『狼少年ケン』の演出・原画担当、2004年8月27日）
 別所 孝治氏（フジテレビ、『鉄腕アトム』担当、2004年8月23日）
 宮崎 慎一氏（元NET、『狼少年ケン』担当、2004年9月6日）
 三輪 俊道氏（元TBS、『エイトマン』担当、2004年8月18日）
 村田 英憲氏（エイケン社長、元TCJ部長、2004年9月2日）

図表の出典

- 図1 日本民間放送連盟編『日本放送年鑑』（1981年版から『日本民間放送年鑑』に改題）をもとに作成。
 図2 『NHK年鑑』をもとに作成。
 図3 『NHK年鑑』、『日本放送年鑑』をもとに作成。
 図4 新聞は日本新聞協会編『日本新聞年鑑』および『電通広告年鑑』、出版は出版年鑑編集部編『出版年鑑』、放送は『NHK年鑑』『日本放送年鑑』、それに『ドキュメント 戦後放送史II』をもとに作成。
 図5 電通編『電通広告年鑑』をもとに作成。
 図6 日本放送出版協会編『放送文化』1967年5月号をもとに作成。
 図7 『日本のテレビ編成』をもとに作成。
 図8 映画興行収入は時事映画通信社編『映画年鑑』および通商産業省編『映画産業白書』、放送事業者事業収入は『NHK年鑑』『日本放送年鑑』をもとに作成。
 図9 『NHK年鑑』、『TBS50年史』、『タイムテーブルから見たフジテレビ40年』、『テレビ朝日社史』、『TVアニメ25年史』をもとに作成。
 図10 『NHK年鑑』、『テレビ 夢 50年 データ編』、『TBS50年史 資料編』、『フジテレビ社史年表』、『テレビ朝日社史』をもとに作成。
 図11 ビデオリサーチ社調べ。
 表1 『TBS50年史』、『テレビ朝日社史』、『TVアニメ25年史』、および今回の取材をもとに作成。
 表2, 4, 5 『テレビ番組の変遷』をもとに作成。
 表3 『NHK年鑑』、『テレビ番組の変遷』、『大衆とともに25年』、『TBS50年史』、『タイムテーブルから見たフジテレビ40年』、『テレビ朝日社史』、『朝日新聞縮

刷版』をもとに作成。

このうち、NETの3本のアニメーションは、3か月から1年間の休止期間を
さんで数回に分けて放送されている。

表6 『テレビ 夢 50年 データ編』、『TBS 50年史 資料編』、『フジテレビ社史
年表』、『テレビ朝日社史』をもとに作成。

A Discussion of the Historical Background to the Broadcasting of *Astro Boy*: From the Perspective of Programming and Industry

FURUTA Hisateru (Professor, Seijo University)
furuta@seijo.ac.jp

ABSTRACT

More than forty years have passed since television broadcasts of *Tetsuwan Atomu* (*Astro Boy*), Japan's first authentic animation series, began. The series was aired on Fuji Telecasting from January 1963 to December 1966. In this paper, I will examine why *Astro Boy* was broadcast in the first half of the 1960s from the viewpoints of programming, program production, and industry, and attempt to situate the *Astro Boy* period within the overall history of Japanese broadcasting.

Japanese broadcasting acquired the new medium of television, which established itself as a new, although small, industry in the first half of the 1960s, at a time when the domestic economy was growing rapidly. During this period, television broadcasting in Japan succeeded in weaning itself from excessive dependence on foreign-made material in the film and animation genres and gradually began airing more domestically-produced content.

Programming shows clear evidence of this shift: television from the late 1950s to the early 1960s showed a profusion of American made-for-TV films. These were replaced by domestically-produced TV films beginning from around 1965, when the Japanese film industry reversed its policy, dating from the mid 1950s, of not allowing films for release in movie theaters to be aired on television, and began producing made-for-TV films itself. This also boosted the income of the new television broadcasting industry beyond that of the film industry, meaning that television became a supporting industry to cinema since it ordered domestically-produced TV films for broadcasting.

In the field of animation, meanwhile, foreign animation broadcasts, like American TV films, were also widespread. This provided the impetus for the showing of domestic animation series, which began appearing in 1963 and soon completely routed foreign animation. The domestic animation production industry, then in a period of flux, broke into television broadcasting by accepting broadcasting fees much lower than production costs, and this acted conversely to increase the industry's dependence on broadcasting.

Thus the broadcasting of *Astro Boy* symbolizes the direction of programming and program production in the first half of the 1960s and also constitutes a milestone in the developmental process of broadcasting as a new industry.